

平成19年度

第11回 視聴覚教育総合全国大会
第58回 放送教育研究会全国大会
合同大会（東京大会）

大会テーマ

「ネットワーク社会におけるメディアとヒューマンコミュニケーション」

主 催 全国放送教育研究会連盟、**NHK**
視聴覚教育総合全国大会連絡協議会
日本学校視聴覚教育連盟、全国視聴覚教育連盟、全国高等学校メディア教育研究協議会
(財)日本視聴覚教育協会／(財)松下教育研究財団

共 催 東京都放送教育研究協議会、(財)日本放送教育協会
後 援 文部科学省、総務省、厚生労働省、東京都教育委員会
日本教育メディア学会、日本教育工学会、日本教育工学協会
日本視聴覚教具連合会、(社)映像文化製作者連盟

日 程 平成19年10月26日(金)・27日(土)

会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

目次

CONTENTS

■ ご挨拶

視聴覚教育総合全国大会連絡協議会
全国放送教育研究会連盟

会長 井内 慶次郎 4
理事長 三角 哲生 5

■ 大会日程

..... 6

■ 会場案内

..... 7・8

■ 1日目 全体会

..... 11

◇ 開会行事＜主催者挨拶・来賓挨拶＞

◇ 記念講演＜「映画という集団創作」山田洋次 監督＞

◇ 表彰式＜各団体表彰＞

◇ シンポジウム「地デジの教育活用に関するパネル討議」 12
＜2011年 テレビ放送のデジタル化で授業はどう変わるか？＞

◇ 懇親会

■ 2日目 団体別 分科会

■ 2日目 団体別 部会一覧

..... 14

■ 放送教育

..... 15

◇ 開会行事

◇ ポスターセッション

■ 放送教育 課題別・番組別研究交流会

..... 18

①心を育てる

衛藤 由季（福岡県 学校法人玄海学園貝塚幼稚園）

②考える力を育てるⅠ

塚崎 典子（さいたま市立大宮東小学校）

③考える力を育てるⅡ

竹下 佳余（千代田区立九段小学校）

④ことばの力をつける

渡邊 光浩（宮崎県三股町立勝岡小学校）

⑤キャリア教育の充実に向けて

熊谷 久恵（気仙沼市立鹿折小学校）

⑥特別支援教育の充実と拡がりに向けて

金井 義明（熊本市立城東小学校）

⑦コミュニケーションスキルを育てる

金原健太郎（生駒市立生駒小学校）

⑧「日本語の乱れを叱る」「金子みすずを読む」

高倉 誠（東京都昭和第一学園高等学校）

杉岡 道夫（都立一橋高等学校）

安井 政樹（室蘭市立絵鞆小学校）

宮田 学（岸和田市立常盤小学校）

中井 厚子（京都市立唐橋小学校）

■ 視聴覚教育 パネルディスカッション

◇ テーマ＜ネットワーク社会の進展をふまえた「教育の情報化」と視聴覚教育
ー改正「教育基本法」をふまえてー

..... 22

■ 視聴覚教育 学視連 分科会

..... 23

◇ 学視連 分科会Ⅰ

ー学習・保育活動にICT、教育メディアを積極的に活用している実践事例ー

①絵本の楽しみを広げるサウンドストーリーー幼稚園教育におけるマルチメディア教材の活用ー

東京都品川区立二葉幼稚園 教諭 大澤 洋美 24

②コンピュータによる機械制御を活用した実践事例 ―クラブ活動における活用を中心にした継続実践― 東京都足立区立皿沼小学校 教諭 内田 忠康	26
③さまざまな教育メディアを活用した実践 ―6年総合学習、5年国語学習から― 愛知県岡崎市立藤川小学校 教諭 本田 辰美	28
◇学視連 分科会2	
―ネットワーク環境の活用及び情報モラル等への積極的活用実践例―	
①小学校における携帯電話やインターネットでの安全な情報の取捨選択及び 適切な情報発信の仕方を習得する学習の実践 港区立神応小学校 教諭 山内日登志	30
②教育ネットワークを利用した6年総合学習における「バーチャル模造紙」の積極的活用 ―小中間交流を通して― 愛知県岡崎市立井田小学校 教諭 内田 雅之	32
③ネットワークを活用した指導実践 ―サーバー蓄積型コンテンツを活用した実践事例― 川崎市立荻宿小学校 教諭 山口 嘉徳	34
■ 視聴覚教育 全視連・全国メディア研（高校）―分科会	37
◇全視連―分科会	
分科会①	
「視聴覚教育施設におけるメディアサービス事業」	
①「郷土画像・映像資料収集、保存、活用について」 発表者・竹内 哲夫（宮城県登米市視聴覚センター所長）	38
②「春日部市視聴覚センターの研修事業について」 発表者・中台 正弘（春日部市視聴覚センター主査）	40
分科会②	
「地域活性化とメディアボランティア活動」	
①ITボランティア「iの手」について 発表者 大分市 ITボランティア「iの手」 前代表 財津 敏郎 発表者 大分市情報学習センター 指導主事 安東 勝範	42
②視聴覚ボランティア『メディアバンクみるわーく』について 発表者 秋田県 メディアバンクみるわーく 理事 村川 愼一	44
■ 全国メディア研（高校）―分科会	
◇全国メディア研（高校）―分科会1	
①ICTを導入した授業 東京都立砂川高等学校 教諭 延味 道都	48
②インターネットを通じた東京海洋大学の顕微鏡利用 およびiPODを利用した教材提示による授業 東京都立墨田川高等学校 教諭 白石 直樹	47
■ 視聴覚教材・機材等展示研究会	
第43回「教育の近代化展」出展協賛社	48
■ 平成19年度 各団体功労者	51
■ 協賛広告	53

ご挨拶

視聴覚教育総合全国大会連絡協議会

会長 井内 慶次郎



平成19年度第11回視聴覚教育総合全国大会及び第58回放送教育研究会全国大会合同大会の開催にあたり、主催者としてひとことご挨拶申し上げます。

このたび視聴覚教育総合全国大会及び放送教育研究会全国大会関係者の並々ならぬ努力により、はじめて本格的な合同大会を開催できます事はたいへん意義深い有難いことと存じます。

これからの視聴覚教育・放送教育のあり方を求めて、ここ国立オリンピック記念青少年総合センターに関係者一堂に会して、研究協議・討議・実践発表・展示研究等を行う事になりました。

「ネットワーク社会におけるメディアとヒューマンコミュニケーション」を共通主題として、急激に進展する情報化の中で、教育におけるICT環境の整備や指導力の問題、そこに生じた影の部分に対応するための情報モラル教育など、今まで取り組んできた研究成果を足がかりに、新しい課題の解決と問題への対応を目指したいと存じます。

しかし、視聴覚メディア、放送メディアの活用の当面する課題は、文部科学省が進めております地上デジタルテレビ放送の教育活用をはじめ、学力とICT活用の問題、心の教育とコミュニケーション能力の育成、教員のICT活用能力の育成、さらには地域における教育力の問題等多岐・多様であります。

2日間の日程で、全体会における記念講演、地上デジタル放送の教育利用に関するシンポジウムをはじめ、放送教育では課題別・ポスターセッション・番組別研究、視聴覚教育ではパネルディスカッション、ICT活用や情報モラル教育実践、地域のボランティア活動等それぞれ特色のある主題で研究協議が展開されるものと大きな期待を寄せるものであります。

大会の開催にあたり、文部科学省はじめ東京都教育委員会、日本視聴覚教具連合会等、関係団体及び企業等からいただきました御指導と御協力、特に主催者の一員である日本放送協会からのご支援に心からの謝意を表します。

終わりに、はじめての試みでもあります視聴覚教育総合全国大会・放送教育研究会全国大会の合同開催について、真摯に協議を重ね調整し企画運営に当たられた大会実行委員会及び事務局の関係各位に深く御礼申し上げますと共に、本大会が、所期の目的を立派に達成することができますようお祈り申し上げご挨拶とします。

ご挨拶

全国放送教育研究会連盟

理事長 三角 哲生



第58回放送教育研究会全国大会の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。

今大会は、第11回視聴覚教育総合全国大会との合同大会として開催し、1日目は記念講演やパネル討議、2日目は放送教育独自の内容を企画しております。

2日目、放送教育として午前はポスターセッション、午後は課題別・番組別研究交流会を設けております。ポスターセッションでは、全国から応募された方や各研究会から推薦された方が日頃の放送教育実践を発表しあい、その内容を競います。課題別・番組別研究交流会では、8分科会でそれぞれの活用番組を中心に校種の枠を越えて参加していただき、参加者の方も協議に加わり、研究を深めていただきます。

2011年を控え、一般家庭では地上デジタル放送の普及も進み、学校でもICT活用が進む中、その内容において総合的な要素をもつ学校放送番組の重要性も高まってきています。そのような背景もあり、NHKティーチャーズネットも登録者が1万人を越え、全放連のメンバーが協力参加しましたNHK発行のデジタル教材関連パンフレットも増刷をする状況となっているとのことです。こうした中、これからの時代にたくましく生きていく子どもたちのために、確かな生きる力を育成していく放送教育研究が一層深まり、ご参加される先生方にとってこの大会が一つのステップとして位置づけていただけるよう、期待しております。

なお、今大会の開催にあたっては、視聴覚教育総合全国大会連絡協議会の方々をはじめ、NHK、関係機関、団体の皆さまに、多くのご協力をいただきましたことを感謝しお礼を申し上げます。

大会日程

10月26日(金)

12:30 13:00 13:20 14:35 15:00 17:15 18:00

受付	開会 行事	記念講演	表彰式	休 憩	地デジの教育活用 シンポジウム	展示研究会 (各団体理事会)	懇親会
カルチャー棟 小ホール						(理事会はセンター棟)	国際交流棟 1F

視聴覚教材・教具 展示研究会 I

10月27日(土)

放送教育

9:00 9:30 10:20 12:00 13:20 15:30 16:30 18:00

受付	開会 行事	ポスターセッション	昼食 展示研究会	課題別・番組別研究交流会	閉会 行事	展示研究会 (抽選会)
カルチャー棟 小ホール	カルチャー棟 小ホールホワイエ			センター棟 4F	センター棟 402	カルチャー棟 展示コーナー

視聴覚教材・教具 展示研究会 II

視聴覚教育

9:00 9:30 12:00 13:20 16:30 18:00

受付	パネルディスカッション	昼食 展示研究会	団体別分科会	展示研究会 (抽選会)
センター棟 501			センター棟 3・4・5F	カルチャー棟 展示コーナー

視聴覚教材・教具 展示研究会 II

会場案内図

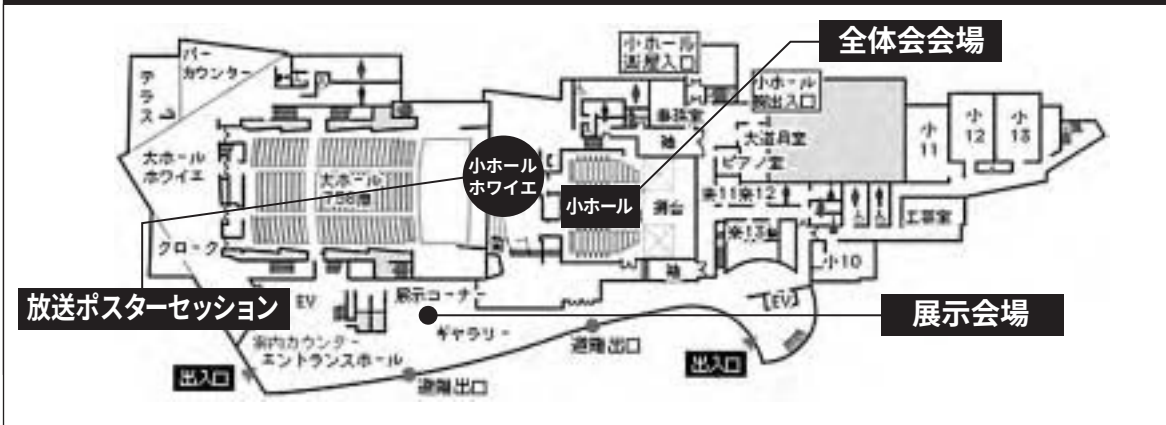


□ 懇親会
10月26日(金)18時～
国際交流棟1階にて

□ 昼食
各自センター棟2階カフ
エテリアまたはカルチャ
ー棟2階レストランにて

会場案内

カルチャー棟—小ホール

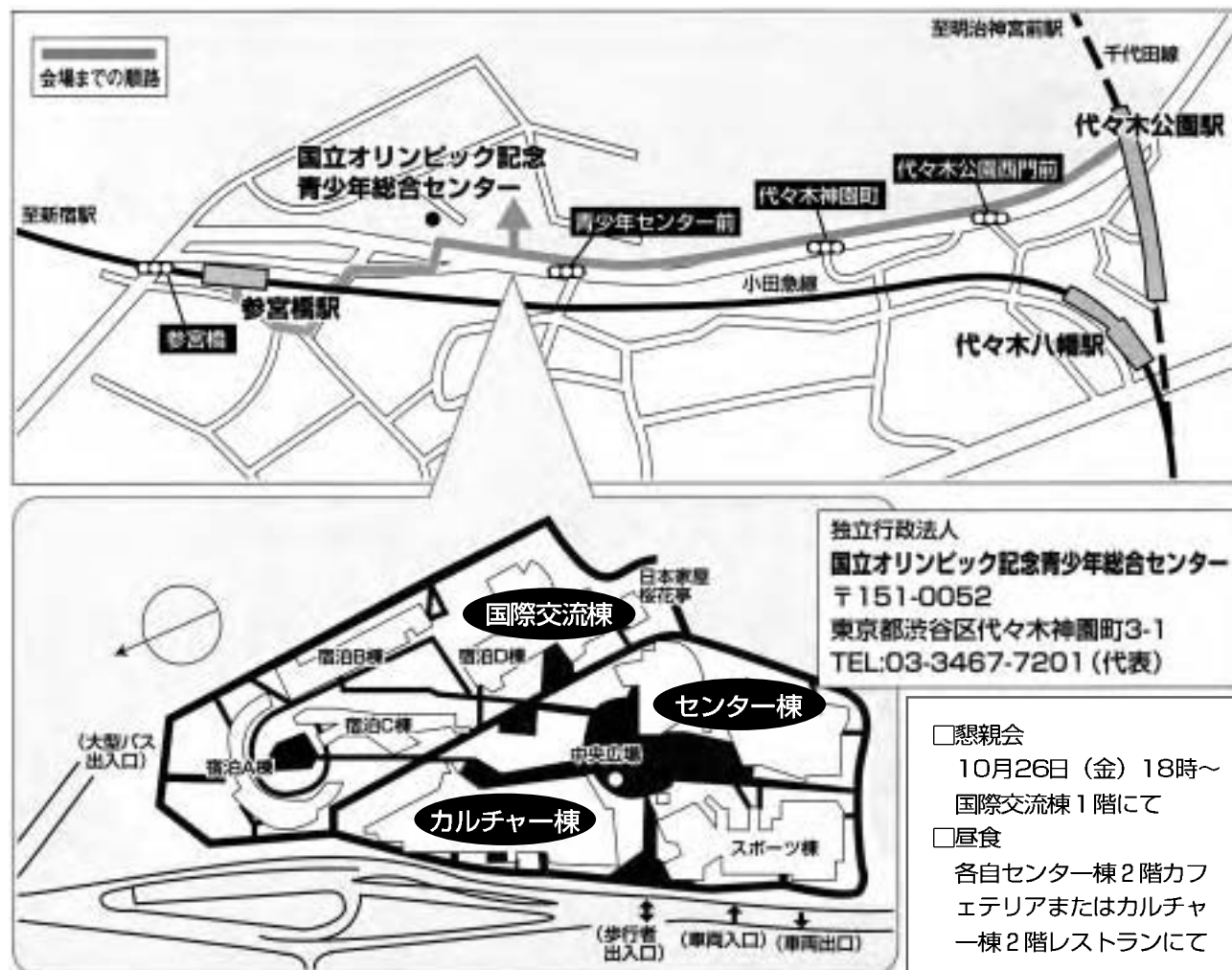


センター棟—3F・4F・5F



会場案内図

◆国立オリンピック記念青少年総合センター 周辺地図



会場へのアクセス (交通機関)

最寄り駅

小田急線 参宮橋駅より 徒歩約7分
東京メトロ千代田線 代々木公園駅より
(代々木公園方面出口)
徒歩約10分

東京駅・上野駅・品川駅など山手線各
駅から山手線または中央線で新宿駅の
りかえ

小田急線で 新宿駅より2駅目

山手線 原宿駅のりかえ

東京メトロで 明治神宮前駅より1駅目

羽田空港から

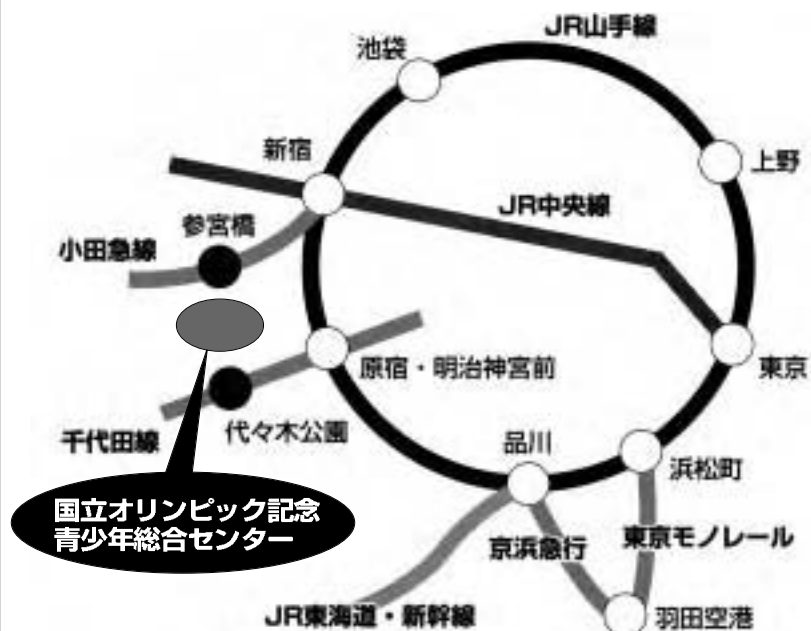
東京モノレールで 浜松町駅のりかえ

JR山手線で新宿または原宿駅へ

京浜急行で 品川駅のりかえ

JR山手線で 新宿または原宿駅へ

都内主要駅から (路線図)



大会1日目

全体会

10月26日（金）

1日目

全体会

カルチャー棟 小ホール

開会行事.....13:00

主催者挨拶・来賓挨拶

視聴覚教育総合全国大会連絡協議会会長
日本放送協会 専務理事 放送総局長
文部科学大臣祝辞

井内慶次郎
原田 豊彦



記念講演

13:20～

「映画という集団創作」

山田 洋次 監督

山田洋次（やまだようじ）監督

1931年 大阪生まれ。幼少時を中国東北部（旧満州）で過ごし、1947年に日本に引き揚げる。
1955年 松竹大船撮影所に入社。以後、2000年にこの撮影所が歴史を閉じるその年まで、この場所で映画を製作する。

主な作品として『男はつらいよ』シリーズの他、『馬鹿まるだし』『家族』『故郷』『幸福の黄色いハンカチ』『息子』『学校』シリーズ、藤沢周平原作の時代劇『たそがれ清兵衛』（第76回米国アカデミー賞外国語映画賞ノミネート）『隠し剣 鬼の爪』『武士の一分』がある。最新作は、吉永小百合主演の『母べえ（かあべえ）』（2008年1月26日公開）。

表彰式.....14:35

各団体別表彰（P51参照）

シンポジウム

地デジの教育活用に関するパネル討議等.....15 : 00

テーマ 「2011年 テレビ放送のデジタル化で授業はどう変わるか？」

◎文部科学省 事業説明

樫 泰文（文部科学省生涯学習政策局参事官）

◎パネリスト

生田 孝至（新潟大学人文社会・教育科学系系長）	地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業企画委員会主査
平沢 茂（文教大学教育学部教授）	視聴覚教育総合全国大会連絡協議会指導者代表
木原 俊行（大阪教育大学教授）	全国放送教育研究会連盟指導者代表

◎事例発表

千葉県船橋市CDT研究協議会
富山地域デジタルテレビ教育利用研究協議会

◎デモンストレーション

NHK、日本視聴覚教具連合会

協力：文部科学省・デジタル放送教育活用推進協議会

文部科学省委託 「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業」

平成15年12月から、三大都市圏において地上デジタルテレビ放送が開始され、平成23年には、テレビ放送はアナログからデジタルへと完全移行されることになっています。これを受けて、平成17年4月に、学識経験者、財団法人日本視聴覚教育協会、財団法人日本放送教育協会、財団法人民間放送教育協会、財団法人松下教育研究財団が連携して、デジタル放送教育活用促進協議会を設立し、文部科学省の委託を受け、「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進事業」の実施を行うことになりました。デジタル放送教育活用促進協議会では、企画委員会を組織し、教育委員会、研究実践協力校、地域放送局で構成される地域コンソーシアムにモデル事業を委託し、平成19年度は全国6地域21校のモデル校で、実践を進めています。

詳細は→ <http://www.chidigi.jp/>

平成19年度 「地上デジタルテレビ放送の教育活用促進に関わる事業」採択地域・学校

【札幌市デジタル放送教育活用促進協議会】

札幌市立美しが丘緑小学校／札幌市立栄緑小学校／札幌市立北辰中学校／北海道札幌平岸高等学校

【千葉県船橋市CDT研究協議会】

船橋市立行田東小学校／船橋市立三山東小学校

【東京地区地上デジタル放送教育活用促進協議会】

港区立神応小学校／三鷹市立第一小学校／三鷹市立第七中学校

【富山地域デジタルテレビ教育利用研究協議会】

富山市立堀川南小学校／富山大学人間発達科学部附属小学校／高岡市立中田中学校／富山県立雄山高等学校

【静岡市デジタル放送教育活用促進協議会】

静岡市立安西小学校／静岡市立清水江尻小学校／静岡市立清水興津中学校／静岡市立商業高等学校

【兵庫県デジタル放送教育活用促進協議会】

尼崎市立立花南小学校／加古川市立志方東小学校／学校法人須磨学園中学校／兵庫県立舞子高等学校

懇 親 会.....18 : 00

国際交流棟1F
(P8参照)

大会2日目

団体別 分科会

10月27日（土）

大会 2 日目 団体別部会一覧

放送教育 課題別・番組別研究交流会

発表者	所 属	テーマ
衛藤 由季	福岡県学校法人玄海学園貝塚幼稚園	心を育てる
塚崎 典子	さいたま市立大宮東小学校	心を育てる
竹下 佳余	千代田区立九段小学校	考える力を育てるⅠ
渡邊 光浩	宮崎県三股町立勝岡小学校	考える力を育てるⅡ
熊谷 久恵	気仙沼市立鹿折小学校	考える力を育てるⅡ
金井 義明	熊本市立城東小学校	ことばの力をつける
金原健太郎	生駒市立生駒小学校	ことばの力をつける
高倉 誠	東京都昭和第一学園高等学校	キャリア教育の充実に向けて
杉岡 道夫	都立一橋高等学校	キャリア教育の充実に向けて
安井 政樹	室蘭市立絵鞆小学校	特別支援教育の充実と拡がりに向けて
宮田 学	岸和田市立常盤小学校	コミュニケーションスキルを育てる
中井 厚子	京都市立唐橋小学校	コミュニケーションスキルを育てる

視聴覚教育 学視連 分科会

◆学視連 分科会1		
—学習・保育活動にICT、教育メディアを積極的に活用している実践事例—		
絵本の楽しさを広げるサウンドストーリー —幼稚園教育におけるマルチメディア教材の活用—	東京都品川区立二葉幼稚園	教諭 大澤 洋美
コンピュータによる機械制御を活用した実践事例 —クラブ活動における活用を中心にした継続実践—	東京都足立区立皿沼小学校	教諭 内田 忠康
さまざまな教育メディアを活用した実践 —6年総合学習、5年国語学習から—	愛知県岡崎市立藤川小学校	教諭 本田 辰美
◆学視連 分科会2		
—ネットワーク環境の活用及び情報モラル等への積極的活用実践例—		
小学校における携帯電話やインターネットでの安全な情報の取捨選択及び適切な情報発信の仕方を習得する学習の実践	港区立神応小学校	教諭 山内日登志
教育ネットワークを利用した6年総合学習における「バーチャル模造紙」の積極的活用 —小中間交流を通して—	愛知県岡崎市立井田小学校	教諭 内田 雅之
ネットワークを活用した指導実践 —サーバー蓄積型コンテンツを活用した実践事例—	川崎市立荻宿小学校	教諭 山口 嘉徳

視聴覚教育 全視連 分科会

◆分科会①	
「視聴覚教育施設におけるメディアサービス事業」	
「郷土画像・映像資料収集、保存、活用について」	発表者・竹内 哲夫（宮城県登米市視聴覚センター所長）
「春日部市視聴覚センターの研修事業について」	発表者・中台 正弘（春日部市視聴覚センター主査）
◆分科会②	
「地域活性化とメディアボランティア活動」	
「ITボランティア『iの手』について	発表者・財津 敏郎（大分県「ITボランティア『iの手』」前代表）
	発表者・安東 勝範（大分市情報学習センター指導主事）
「視聴覚ボランティア『メディアバンクみるわーく』について」	発表者・村川 慎一（秋田県「メディアバンクみるわーく」理事）

視聴覚教育 全国メディア研（高校）分科会

◆ICTを導入した授業		
インターネットを通じた東京海洋大学の顕微鏡利用	東京都立砂川高等学校	教諭 延味 道都
およびiPODを利用した教材提示による授業	東京都立墨田川高等学校	教諭 白石 直樹

2日目 放送教育 開会行事・ポスターセッション

本年度の第58回放送教育研究会全国大会は、放送教育研究の一層の「広がり」と「深まり」を求めて、「ポスターセッション」と「課題別・番組別研究交流会」を行います。
それぞれの研究会では、全国各地からたくさん実践が報告されます。放送教育に取り組んでいる方、放送を活用した学習に興味をお持ちの方、「情報」を活用した実践に取り組んできた方など、様々な視点から研究を深めて頂ければ幸いです。多数の方々のご参加をお待ちしています。

開会行事.....9:30～10:20 カルチャー棟 小ホール

開会あいさつ／オリエンテーション／基調提案等

ポスターセッション.....10:20～12:00 カルチャー棟 小ホールホワイエ

【時程】

10:20 オリエンテーション
10:30 前半
11:10 休憩 交替
11:20 後半
12:00 投票 昼食

◆審査委員長
木原 俊行(大阪教育大学教授／ 放送教育統括指導講師)
◆審査委員
守屋 貞紀(全国放送教育研究会連盟事務局長)
◆審査委員
福田 哲夫(NHK制作局第1制作センター学校教育番組部チーフプロデューサー)
◆審査員 参加者

【参加者のみなさんへ】

- ポスターセッションは前後半各40分の2交替で行います。
- 各ポスターの実践者に対して積極的に質問や意見をお寄せください。(発表者は質問や意見に答える形で実践内容を報告します。)
- 参加者のみなさんに優秀なポスターを投票で選んでいただきます。評価の観点は以下の通りです。なお、投票によって選ばれたポスターは午後の全体会で表彰します。

【投票の仕方と評価の観点】

「魅力的な放送教育の取り組みである」と思うポスターを選んでください。実際にポスターをご覧になったり、発表者と意見交換をしたりする中で、優れた実践と思われるものを選び、ポスターの番号を投票用紙に記入してください。なお、評価の観点を下記に示しましたのでご注意ください。

- 番組の特性や特徴を踏まえている
- 番組を活用する必然性が明確である
- 番組利用に、継続性や多様性を確認できる
- 番組利用が子どもの成長(学力や人間性の向上)を促している

投票用紙は会場入口でお一人一枚ずつお渡しします。発表者不在のポスター及びNHKのポスターを除くすべての実践の中から、上記の観点到照に合わせて「優秀」と思われるものを3点選び投票してください。よろしくお願い致します。

優秀ポスター投票用紙

全国放送教育研究会連盟 印

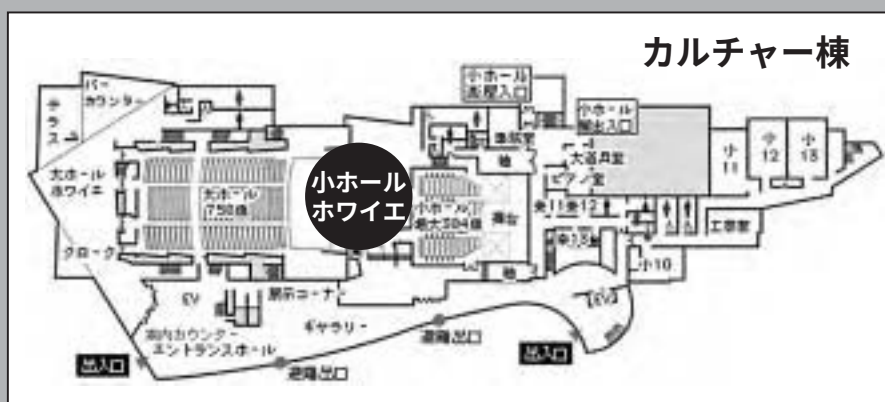
次の観点を踏まえて、あなたが「魅力的な放送教育の取り組みである」と思うポスターを推薦してください。別表の中から優れた実践3つを選び、その番号を□に記入してください。なお、発表者はご自身のポスターを選ばれてもかまいません。

- ・ 番組の特性や特徴を踏まえている。
- ・ 番組を活用する必然性が明確である。
- ・ 番組利用に、継続性や多様性を確認できる。
- ・ 番組利用が子どもの成長(学力や人間力の向上)を促している。

私は、☐ ☐ ☐ を優秀ポスターに推薦します。

【ポスターセッション発表者一覧】

No	番組名	発表者	所属園・校
1	おはなしでてこい わたしのきもち おかあさんといっしょ	野崎 久子	岡山県久米郡美咲町旭保育園
2	おはなしのくに	浅香 一世	大阪府高槻市立阿武山小学校
3	おはなしのくに	若林亜希子	東京都三鷹市立第三小学校
4	わかる国語 読み書きのツボ3・4年	北村 義人	宮崎県宮崎市立住吉小学校
5	わかる国語 読み書きのツボ5・6年	大室 健司	埼玉県さいたま市立蓮沼小学校
6	わかる国語 読み書きのツボ5・6年	金原健太郎	奈良県生駒市立生駒小学校
7	わかる国語 読み書きのツボ5・6年	田端 芳恵	東京都目黒区立田道小学校
8	わかる国語 読み書きのツボ5・6年	水野 宗市	宮崎県宮崎市立池内小学校
9	わかる国語 読み書きのツボ5・6年 マテマティカ2	愛甲 昌弘	広島県三次市立三和小学校
10	わかる国語 読み書きのツボ5・6年 えいごでしゃべらないとJr.	熊谷 久恵	宮城県気仙沼市立鹿折小学校
11	かんじるさんすう1、2、3！	竹下 佳余	東京都千代田区立九段小学校
12	日本とことん見聞録	草柳 譲治	神奈川県川崎市立夢見ヶ崎小学校
13	にんげん日本史	佐野 工	宮崎県清武市立清武小学校
14	しらべてゴー！ 理科3年 ふしぎだいすき	宮崎 靖	富山県小矢部市立石動小学校
15	理科3年 ふしぎだいすき	谷口 義昌	鳥取県鳥取市立醇風小学校
16	理科3年 ふしぎだいすき	細見 隆昭	兵庫県丹波市立西小学校
17	理科5年 ふしぎワールド	根井 光洋	神奈川県川崎市立日吉小学校
18	理科5年 ふしぎワールド	山脇 隆史	鳥取県鳥取市明倫小学校
19	理科6年 ふしぎ情報局	佐藤 拓	神奈川県川崎市立久本小学校
20	ど〜する？地球のあした	高野 健一	神奈川県横浜市立日限山小学校
21	おこめ	片岡 義順	神奈川県川崎市立岡上小学校
22	みんな生きている	金子 実	神奈川県横浜市立上大岡小学校
23	道徳ドキュメント	松川 厚雄	東京都杉並区立荻窪小学校
24	みてハッスル きいてハッスル	圓子 靖子	青森県階上町立小舟渡小学校
25	みてハッスル きいてハッスル	桜井 淳宏	大阪府守口市立八雲小学校
26	10min.ボックス 情報	米田 謙三	大阪府私立羽衣学園高等学校
27	NHK学校放送番組の紹介	武田 一則	NHK学校放送番組部

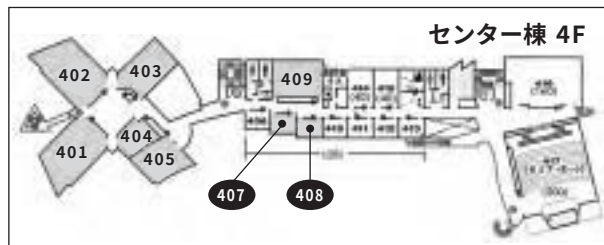


MEMO

[illegible]

2日目 放送教育 課題別・番組別研究交流会

課題別・番組別研究交流会.....13:20 ~ 15:20 センター棟 4階



①心を育てる

401号室



コーディネーター

浅井 和行
京都教育大学



コーディネーター

堀田 博史
園田学園女子大学

取り上げる2つの番組は、“こころ”という共通のキーワードがあります。命の尊さを感じ取る「みんな生きている」、自然の不思議の中で命の誕生を見る「しぜんとあそぼ」です。子どもの心の育ちを願う教師が、番組視聴を通じた子どもの姿から、新たな発見をしていきます。どのような発見があるのでしょうか？当日をお楽しみに！

また、浅井・堀田が、小学校と幼・保の実践発表を、立場を変えてコメントするのも見所のひとつです。ぜひ多くの先生方の参加をお待ちしています。

活用番組「しぜんとあそぼ」

衛藤 由季（福岡県 学校法人玄海学園貝塚幼稚園）

本園は、本年度九州地区幼児放送視聴覚教育研究会九州大会の公開保育を控えて、現在、心を育てる環境の一つとしてラジオやテレビの放送番組を気軽に利用し、自由な雰囲気の中で感じたり、響き合ったり、共感したりしながら発達に沿った取り組みを重視し幼児期におけるメディアリテラシー（豊かな感性）を育むことをテーマとして、各学年実践研究に取り組んでいます。発表では、4月からの実践研究をもとに発表致します。

活用番組「みんな生きている」

塚崎 典子（さいたま市立大宮東小学校）

心を育てる…その前に、今、担任として子どもたちの心が分かりますか？私は今、なかなか心を開いてくれない子どもたちを前にして、とても悩んでいます。でも、子どもたちの心の中が覗けないと、学級経営も思うとおりには進みません。そんな中でもこの『みんな生きている』という番組を視聴すると、子どもたちの心が少しずつ見えてくるのです。そしてそれに対して教師も本気で係わることによって、子どもたちとも心の距離がだんだん縮まってくるのです。そんな実践を皆さんに分かりやすくお伝えできたら…、と思っています。

②考える力を育てる I

407号室



コーディネーター

草柳 譲治
全健連効力向上プロジェクト委員会

子どもたちに「考える力」を育てる手立てをみなさんは日頃どのようにしているのでしょうか。本分科会では、算数を切り口に、そのことを参加された方々と共に考えていきたいと思っています。ワークショップ形式を基本に、発足3年目となる全放連の研究プロジェクト「学力向上プロジェクト」での実践を絡め、学校放送番組と「考える力」の多様な接点を見つけていきたいと思っています。

活用番組「かんじるさんすう1、2、3！」

竹下 佳余（千代田区立九段小学校）

『かんじるさんすう1、2、3！』で紹介されている多様な算数活動は、算数の面白さや不思議さを「感じ取る力」を磨き、算数的思考を促す良質な教材です。今回の実践では、①番組を視聴 ②自分で選択した算数活動に取り組む ③算数活動の楽しさを大人に伝える、という3部構成で授業を組み立てることで、算数への関心を高めるとともに、「活動を理解するために考える」「より楽しむために考える」「実感したことを伝えるために考える」という思考の広がりを期待しました。「豊かな学力」を育む上で、番組とデジタル教材が果たした役割について提案したいと思っています。

2日目 放送教育 課題別・番組別研究交流会

③考える力を育てるⅡ

402号室



コーディネーター

堀田 龍也

メディア教育開発センター



コーディネーター

稲垣 忠

東北学院大学

「考える力」を伸ばす番組活用のポイントは何でしょうか。本分科会では、社会科、理科、環境教育の取り組みを紹介します。他地域の生活や自然、教室では難しい実験や特殊撮影など、映像は豊かな「考えるタネ」を見せてくれます。こうした映像をどう読み解いていくのか、子どもたち自身の体験、思考と深く結びつけるための手だては何か。参加される皆さんといっしょに考えます。

活用番組「日本とことん見聞録」

渡邊 光浩（宮崎県三股町立勝岡小学校）

社会科資料として「日本とことん見聞録」を継続して活用しています。しかしよい映像を見せても、なかなか番組から情報を読み取れないという子どもたちの実態がありました。そこで「映像を読み取る力」の程度に合わせて、「ばんぐみ」や「くりっぶ」の視聴のさせ方を変えながら段階的に鍛えていくよう実践を進めてきました。その結果、ようやく丸ごと視聴が可能な段階に到達できました。

「ど～する？地球のあした」「理科5年 ふしぎワールド」

熊谷 久恵（気仙沼市立鹿折小学校）

2つの放送番組を活用し、「地球温暖化」に関する授業を行いました。子どもたちは、「理科5年ふしぎワールド」の視聴や実験観察から、自然事象についての正しい知識や調査のための技能を習得することができました。さらに、「ど～する？地球のあした」の活用を通して、環境問題について自分で考えたり、判断したりする思考力を身につけていきました。

④ことばの力をつける

403号室



コーディネーター

前田 康裕

熊本市立飽田東小学校

今日、子どもたちの「ことばの力」を高めることが大きな課題となっています。しかし、普段の国語科の授業の中で、その力を向上させていくことは難しいものです。「わかる国語 読み書きのツボ」は、「ことばの力」を焦点化してスキルアップをねらった番組であり、大きな効果が期待できます。

そこで、この部会では、番組を活用した実践レポートを元にして、授業における具体的な学習活動をワークショップ形式で考えていきます。

活用番組「わかる国語読み書きのツボ5・6年」

金井 義明（熊本市立城東小学校）

ニュース番組の放送原稿を作成する過程で、複数の番組を同時に活用し「ことばの力をつける」ことをめざします。これまで、自分たちの思いを相手に伝える際、何に気をつければよいかを心がけさせる手だてが不足し、どう伝えると効果的なのかを十分指導しないまま、子どもたちに任せてしまっていました。そこで、グループで役割分担を行い、自分が担当する番組を視聴し、それぞれに学んだことを共有して原稿を作成します。

活用番組「わかる国語読み書きのツボ5・6年」

金原健太郎（生駒市立生駒小学校）

「わかる国語読み書きのツボ」は、描写力・構文力・論理力・要約力・言語力・批判力といった、普段の国語科の授業において意識的に取り上げることが難しい様々な力を、系統的に楽しく学べる番組内容になっています。この優れた可能性をもつ番組を、国語科の単元と効果的に組み合わせることで、子どもたちの国語力の向上を目指します。さらに番組の見せ方を工夫し、無理なく気軽に活用できる方法を模索します。

2日目 放送教育 課題別・番組別研究交流会

⑤キャリア教育の充実に向けて

405号室



コーディネーター

藤川 大祐

千葉大学



コーディネーター

中橋 雄

福山大学

児童・生徒の職業観・勤労観を育て主体的に進路を選択できるようにする教育である「キャリア教育」が、近年ますます求められるようになっていきます。キャリア教育では、地域での職場体験学習等の直接的な体験が重要と言えますが、さまざまな職業や生き方についての知識を得ることも必要であり、放送番組を適切に活用することが求められます。本交流会においては、NHK「あしたをつかめ～平成若者仕事図鑑～」を中心に、キャリア教育の充実に向けて放送番組をどのように活用すればよいのかについて交流します。

活用番組「あしたをつかめ～平成若者仕事図鑑～」

高倉 誠（東京都 昭和第一学園高等学校）

杉岡 道夫（都立一橋高等学校）

マス・メディアに載った職業観は児童・生徒に大きく影響しますが、社会に対して広い視野を持たせることは、「キャリア教育」の狙いのひとつでしょう。『あしたをつかめ』は、進路指導の他にも、様々な教科と社会を結びつけるのに利用できると考えます。今回は、『あしたをつかめ』や『10min.ボックス』を利用した「より深く情報を読み取る力」を養う授業の提案と、職場体験後の指導について検討を行います。

⑥特別支援教育の充実と拡がりに向けて

404号室



コーディネーター

坂田 紀行

前全放連副理事長

今年度から、盲・聾・養護学校が学校制度として特別支援学校という名称になり、幼稚園、小中高等学校との連携が、より一層深まる時代に入りました。課題別・番組別研究交流会ではこの現状を理解して特別支援教育における放送教育をどのように推進していくか、番組視聴や参加者の実践報告を中心にしながら討議します。また、番組制作者との交流を深め、特別支援学校だけでなく、幼稚園、小中高等学校の先生方の参加も得て、幅広い研究交流を進めていきます。

活用番組「みてハッスル きいてハッスル」

安井 政樹（室蘭市立絵鞆小学校）

「通常学級における特別支援教育のノウハウを生かした指導実践」

特別支援教育は、特別支援学校（学級）のみならず、通常学級においてもその取り組みが必要とされています。今回は、小学校の通常学級で、特別支援教育用番組「みてハッスルきいてハッスル」を活用し、スモールステップで子どもたちの指導に当たっている実践を紹介します。

発達障害の傾向が見られる子だけでなく、すべての子にコミュニケーションスキルやソーシャルスキルなどを身につけさせることで、子どもたちが困り感を少しでも克服し、より快適な学校生活が送れるようにしていきたいと考えています。

特別支援教育について、校種を超えた実践交流ができることを期待しています。

2日目 放送教育 課題別・番組別研究交流会

⑦ コミュニケーションスキルを育てる

409号室



コーディネーター

トム・マーナー

麗澤大学



コーディネーター

西山 光弘

NHK学校教育番組部

小学校への英語教育必修化が検討されている昨今、実際にどのような授業を行っていけばよいのか、学校現場には戸惑いも広がっています。今回はNHKで放送している二つのタイプの番組「えいごリアン」シリーズと「えいごでしゃべらないとJr.」の二つの番組の実践を取り上げます。コミュニケーション能力を育てるために、メディアをどのように活用すればよいのか、テーマとなります。

活用番組「えいごリアン4」

宮田 学（岸和田市立常盤小学校）

「子ども教師も楽しい英語活動を」～英語が苦手な方のためにえいごリアンを～

95.8%の学校で何らかの形で英語活動が実践されています（平成18年度）。ALTが日常的に来てくれる学校もあるようですが、現実にはALTばかりを頼みにするわけにはいきません。

「えいごリアン4」活用すれば、「ALTがいなくても」、「英語が苦手」という方にも英語活動の授業を造ることができます。具体的にどのように活用すればいいのか、「子どもが楽しいって何だ?」「教師の楽しいって何だ?」を中心に、誰にでもできる英語活動の授業を提案していきたいと思います。

活用番組「えいごでしゃべらないとJr.」

中井 厚子（京都市立唐橋小学校）

コミュニケーション・スキルは「人に伝えたい」という熱い思いがあってこそ身につくもの。そんな熱いコミュニケーション・マインドを授業の中でどう創り出すかが悩みです。そこで今回、学校の活動全体の中のコミュニケーション・マインドを育てる「場」をまず教師が意識化することから始めました。そして子ども達の活動の意欲を支える「えいごでしゃべらないとJr.」の番組とHP。そこからうまれた交流を中心に報告します。

⑧ 「日本語の乱れを叱る」「金子みすずを読む」

408号室



コーディネーター

飯窪 長彦

元NHKアナウンサー

日本語の読み方のバラエティー番組で読めないタレントさんに腹を抱えて笑っているうちにだんだん寂しい気持ちになってきました。漢字が読めないとは意味がわからない、そしてそれについて考えられない人間が増えていることです。私の年齢ぐらいは知らないことは恥だという考え方です。恥ずかしいことなのです。だからそっと調べたり、聞いたりしたものです。タレントさんの中には知らないこともキャラクター（キャラ）の一部と思っているようです。

自分の国の文化、歴史を語るとき、考えるときは自分の国のことばでします。ことばを大切にしましょう。



コーディネーター

久保田昌子

元港区立麻布小学校

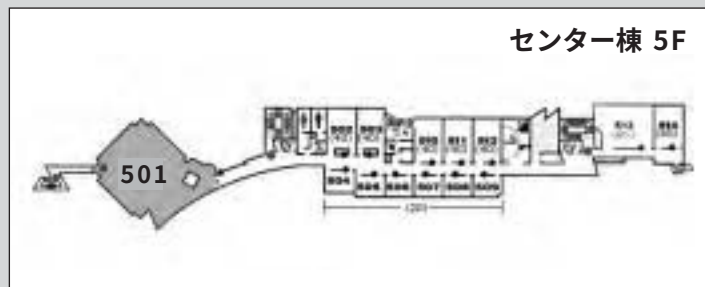
「金子みすず」の詩は沢山の人々に愛され慕われて口ずさまれております。私も、その中の一人なのです。最初の衝撃は「大漁」との出会いです。頭の電池が一瞬切れしました。えっ、なに、戦中戦後の食糧難を生きてきた子ども時代のさがでしょう「大漁! でよかったねー」と、でも違うのです。お魚の世界に心を泳がせるはめになります。朗読ことばあそび倶楽部（武蔵野市土曜学校）の子どもも、朗読サークルの大人も誰もが「金子みすず」の詩をこよなく愛して自分の読みに浸っているのです。気づかなかった向こう側のひと（人の気持ち、様子、情景）に心がひかれます。

◇閉会行事.....15:30~16:30 センター棟 402

講評／ポスターセッション表彰／大会のまとめ／閉会あいさつ

2日目 視聴覚教育 パネルディスカッション

パネルディスカッション.....9:30～ 12:00 センター棟 501



テーマ ネットワーク社会の進展をふまえた「教育の情報化」と視聴覚教育 —改正「教育基本法」をふまえて—

◇コーディネーター

筑波大学名誉教授、八洲学園大学教授、中央教育審議会委員

山本 恒夫

◇パネリスト

(視聴覚教育関係代表)

新潟大学人文社会・教育科学学系長、日本教育メディア学会会長

生田 孝至

(社会教育関係代表)

財団法人全日本社会教育連合会常務理事

加藤 雅晴

(教材機器提供者代表)

株式会社内田洋行取締役常務教育システム事業部長、教育総合研究所長

大久保 昇

ネットワーク社会は我々の予想を超える速さで進展している。光と陰の部分への速やかな対応が強く求められている。同時に、対応の柱として「教育の情報化」という視点が国策として大きく浮上し、ネットワーク環境の整備、ICT活用能力の向上、教育用コンテンツの充実、情報モラルへの対応などの普及促進が強く求められている。

しかしながら、こうした現状に対してここ数年、やや対処療法的な対応が中心という現場の実態がある。では、何が必要かと言えば、基本に帰る、あるいは現状に対する基本的な対応の仕方を改めて学んでいく必要性がある。

そこで、昨年12月に改正された「教育基本法」、そこに盛り込まれた考え方をふまえ、ネットワーク社会の進展に対応しながら、学校教育や社会教育の場において、視聴覚教育をどのように活かしていったらよいのか、今後のビジョンを有識者の方々にお聞きし、フロアからの質疑も含めて、議論を深めていこうと考えている。

参考

改正教育基本法と「視聴覚教育」との関連

第1条（教育の目的）教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び国家の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。

第2条（教育の目標）一、幅広い知識と教養を身に付け、………

二、………創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、………

三、………公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、………

第3条（生涯学習の理念）………その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において………

第5条（義務教育）2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の能力を伸ばしつつ………

第6条（学校教育）2 ……自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して………

第10条（家庭教育）………保護者に対する学習の機会及び情報の提供………

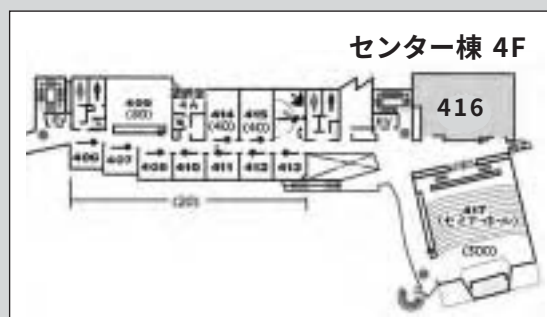
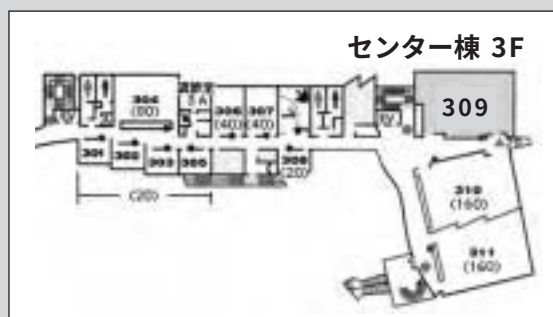
第12条（社会教育）個人の要望や社会の要請にこたえ、………

………学習の機会及び情報の提供………

第13条（学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力）学校、家庭及び地域住民その他の関係者は教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。

2日目 視聴覚教育 学視連一分科会

学視連一分科会.....13:20～ 16:30 センター棟 3F・4F



学視連分科会 1

—学習・保育活動にICT、教育メディアを積極的に活用している実践事例—
教育の情報化という国策としての視点を生かし、学習・保育活動における児童・生徒の理解を深めるために、メディアやコンテンツを積極的に活用している実践事例を提案する中で、ICTの積極的活用・促進の視点で協議を深める。

提案者 1	東京都品川区立二葉幼稚園 教諭 大澤 洋美	絵本の楽しさを広げるサウンドストーリー —幼稚園教育におけるマルチメディア教材の活用—
提案者 2	東京都足立区立皿沼小学校 教諭 内田 忠康	コンピュータによる機械制御を活用した実践事例 —クラブ活動における活用を中心にした継続実践—
提案者 3	愛知県岡崎市立藤川小学校 教諭 本田 辰美	さまざまな教育メディアを活用した実践 —6年総合学習、5年国語学習から—
講 師	お茶の水女子大学教授 坂元 章 先生	司 会 者 東京都小学校視聴覚教育研究会

学視連分科会 2

—ネットワーク環境の活用及び情報モラル等への積極的活用実践例—
ネットワーク社会の進展に伴う光と陰に焦点を当て、ネットワーク環境を積極的に指導に生かしたり、情報モラルの現状への積極的な対応を人とのかわりから追究している実践事例を提案する中で、今後の活用の可能性について協議する。

提案者 1	東京都港区立神応小学校 教諭 山内日登志	小学校における携帯電話やインターネットでの安全な情報の取捨選択及び適切な情報発信の仕方習得する学習の実践
提案者 2	愛知県岡崎市立井田小学校 教諭 内田 雅之	教育ネットワークを利用した6年総合学習における「バーチャル模造紙」の積極的利用 —小中間交流を通して—
提案者 3	神奈川県川崎市立荻宿小学校 教諭 山口 嘉徳	ネットワークを活用した指導実践 —サーバー蓄積型コンテンツを活用した実践事例—
説 明	日本学校視聴覚教育連盟	教室の情報化を目指す機器システムの開発とネットワーク動画コンテンツを活用した実践の仕組み —広域研究ネットワークの構築と実践の共有化—
講 師	関西大学総合情報学部 教授 黒上 晴夫 先生	司 会 者 東京都小学校視聴覚教育研究会

学視連 分科会1

①

絵本の楽しみを広げるサウンドストーリー

—幼稚園教育におけるマルチメディア教材の活用—

東京都品川区立二葉幼稚園 教諭 大澤 洋美

1、はじめに

子ども達は、とても真剣な表情で絵本や物語に聞き入る。そして、毎日のように「今日のお話は、何。」「今日は、〇〇のお話がいい。」「〇〇のお話の続きはないの?」と子ども達の声が寄せられる。

今、子ども達の周りを見ると種類の豊富な子供向けのマスメディアが溢れ、子ども達はその中に浸って育ってきている。しかし、幼稚園に入ると先生に読んでもらう本や物語に大喜びする。先生が読み聞かせる絵本は、巧みな音や華やかな映像がなくても、大好きな先生が読んでくれることで子ども達の心に響いていく。そして、イメージの世界をひろげ想像力を膨らませ遊ぶ。この営みが子ども達の成長にとってとても大切なものであると感じる。

日々子ども達と生活する中で、イメージや想像の世界を広げる心もこもった豊かな環境を作り出したいと、サウンドストーリー作りに取り組んできた。

2、発表のねらい

本発表では、今まで保育の中で活用してきた教材としてのサウンドストーリーを教育的な価値や効果・可能性を探ることで、より一層効果的に活用していきたいと考えている。

発表のねらい

サウンドストーリーを教育的な価値や効果・可能性を探る

なぜサウンドストーリーなのか

4・5歳になるとイメージの世界も広がりをもってくる。

様々な情報が行きかう社会の中で子ども達は育ってきている。

豊かな環境の中に子どもを置くことの大切さ

視聴覚教材の取り入れの重要性

質の高い、温もりのあるマルチメディア

3、実践・活動の概要

(1) 作る

伝えたい絵本を見つけて、スキャナでコピーしたページをパワーポイントに取り込む。音をつけ、語りと映像で絵本を語ることができるようにすることで、オリジナルのサウンドストーリー教材が出来上がる。

(2) 子ども達への読み聞かせ

楽しさの共有

○絵本の絵を映像として大きく映し出すことで、絵を大勢の友達と一緒によく観て楽しめる。

○音楽が流れることで、より一層絵本の世界に引き込まれる。

○身近な先生が、思いを込めて読むことにより、安心して楽しめ心に響く。

オリジナル サウンドストーリー

今、ここのこの子達にと思いを込めて内容を選び、作製して読み聞かせをする。

身近な人の声

友達との楽しさの共有

音の心地よさ

(3) 実践事例

事例1

4歳児4月 学年60人の友達とはじめての誕生日会で楽しむ

2年保育4歳児の入園ばかりの頃である。誕生日会を大勢ですることとはじめての子ども達へのお楽しみのプレゼントとして、『はらぺこおむし』のサウンドストーリーを行なう。

音楽と大きな画像、そして先生の声で話が進められていく。はじめは、「そのお話知っているよ。」と話していた幼児も、じっと話を聞き始める。今まで、椅子から立ったり、友達にかかわりを求めたりしていた幼児もこの時だけは椅子に座ってじっと話を聞いていた。音と声、大きな画面に映し出された絵本の映像が子ども達をひきつけていた。

その後、保育室に戻り自分の好きな遊びを見つけて取り組む時間となる。そこで、制作コーナーに、『はらぺこおむしの』塗り絵を出すと、喜んで塗り始めたA子。

ぬり終わると「先生、これ切って」と言ってきたので、あおむしを切り取るとあおむしを手で動かしながら散歩させ始めた。その様子を見た、他児もあおむしをぬって切り取りあおむしのお散歩遊びが始まる。

はじめて観たサウンドストーリー『はらぺこあおむし』は、誕生会を楽しい雰囲気で包み込んだ。また、遊びのイメージを膨らませて、あおむしの散歩を楽しむきっかけとなった。

事例2

5歳児4月 誕生会でおもしろさを知り、自分たちで再現して楽しむ。

学年で行なう5歳児の誕生会では、『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』を担任二人がワニ役と歯医者役になりかけ合いで話を読み聞かせる。コミカルな曲をつけることで話の内容がより楽しく伝わっていった様子。子ども達もワニや歯医者になった気分で表情を変えてみたり、思わず一緒に言葉を言ったりしている。年長児70人が様々な表情で楽しんでいた。

降園時間の学級での活動時に、ワニ役は歯医者役に分かれてもう一度楽しむ機会を作る。ワニの「どきっ」歯医者さんの「どきっ」同じ言葉の繰り返しではあるがそこに込められている気持ちの違いを感じ楽しみながら友達と一緒に言葉のかけ合いを楽しんでいた。

学年全体で楽しんだ話を、学級の友達と再現して、参加することで、言葉の楽しさや友達と一緒に声を合わせる楽しさを感じていた。

事例3

小学生に向けて 物語に興味をもって聞く サウンドストーリーを楽しむ。

交流を行っている小学校の朝の読書タイムに読み手として招待された。1年生から3年生までの約50名の児童への読み聞かせは、子ども達が小さい頃から親しんでいるねずみくんシリーズの『ねずみくんのきもち』にした。思いやりをテーマに作られ、少し長い内容になっている。話が単調なので登場人物が動くように画像を工夫した。子ども達は、とても真剣に話に聞き入っていた。後日、感想が3年生より寄せられた。

<3年生の感想の一部>

3年Aさん

先生の言い方は、役によってちがう声が出せるのは、「すごいなー」と聞きながら思っていました。

曲もあって、スクリーンで見たねずみくんは、ほかのねずみくんシリーズを見た時のねずみくんとはちがったので、びっくりしました。読み聞かせをしてくれてありがとうございました。

3年Sさん

「ねずみくんのきもち」を読んでくれてありがとうございます。わたしも、ねずみくんのきもちは何度も読んだことがあります。わたしは、はじめて「おもしろくて大切なんだな」と思いました。これからは思いやりを大切にしたいです。

小さなサイズのしっとりとした内容の絵本であったが、サウンドストーリーにすることによって子ども達の気持ちをとらえることができた。小学校と幼稚園の教材や指導の工夫の面でも交流が図られた。



4、実践の成果と課題

保育の中でたくさんのサウンドストーリーを子ども達と楽しんできた。わざわざ作らなくてもビデオやDVDを使えばよいのではないかなという意見もあるかもしれない。しかし、私はこの実践を通して日々子どもと接している担任が、『今、ここにいる子ども達に』伝えたい気持ちをもって作り、読み聞かせるからこそ魅力がありまた、その後の保育の中でもいろいろな方法でこの経験が活かせるのではないかと考える。保育の中で活かせるからこそ子ども達のイメージや創造の世界が広がり豊かになっていく。

ゲーム機と向き合い、ビデオやテレビに子守をされて育つ子どもが多いからこそ、今子ども達の豊かな創造性を育む教材の工夫が必要ではないかと思う。

今年は、小学生に向けての教材作りや、いただいた感想から交流活動の新たな可能性と発見もあった。

5、今後の取り組み

パワーポイントへの絵本の画面の取り込み、画面を動かす、音楽をつけるなど技術面でもさらに工夫しながらより質の高い、内容にしていける必要がある。

また、たくさん子ども達が目を輝かせて見て感じ・考え・楽しむことのできる絵本をサウンドストーリーに加えていきたい。

6、参考文献

「はらぺこあおむし」 偕成社 エリック・カール著
もり ひさし著

「ねずみくんのきもち」 ポプラ社 なかえよしお作
上野紀子 絵

「わにさんどきっ はいしゃさんどきっ」

偕成社 五味太郎作・絵

学視連 分科会1

②

コンピュータによる機械制御を活用した実践事例
—クラブ活動における活用を中心にした継続実践—

東京都足立区立皿沼小学校 教諭 内田 忠康

1. 発表のねらい

現在、家庭・学校を問わずコンピュータが使われるようになって久しくなりました。まわりの物事をみるならばコンピュータに関連していないものは無いのではないかなと思えるような世の中です。

学校のクラブ活動の中でも「パソコンクラブ」が作られそれぞれの学校で工夫をこらした活動をしていることと思います。パソコンを利用して絵をかいたり、音楽のソフトを用いて作曲をしたり、またホームページの作成等の内容が多いかと思えます。けれども、絵をかいたり、曲をつくるのがそれほど得意でない児童にとっては興味をひくものではありませんでした。そのような中で何か別の題材は無いものかと常々思っていました。今回、クラブ活動の中での「ロボット作り」、そして今までの関わりについてご紹介いたします。

2. 実践・活動の概要

私の実践は、前任校である北区立赤羽台西小学校（赤西小）でのクラブ活動指導より始まりました。

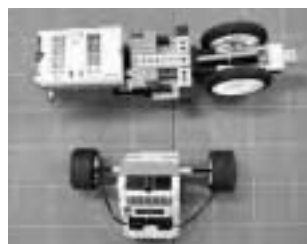
学校にコンピュータが導入された頃は、「BASIC」等のプログラミング言語も利用されておりました。その中に「LOGO」という言語がありました。

LOGOの開発者であるS. パパートの著書「マインドストーム」の中にタートルを実際に動かす実践がのせられていますが、それを見てこのように自分のプログラムしたものが動かせたらどんなに素晴らしいだろうと思いました。そんなおりにLEGOジャパン社の「マインドストーム」というものに出会いました。「マインドストーム」というのは、CPUを組み込んだブロックを中心にロボットを組み立て、パソコンで組んだプログラムをそのブロックに転送して制御するというLEGOのセットです。そのころの「マインドストーム」には、RIS (Robotics Invention System)、RDS (Robotics Discovery Set)、DDK (Droid Developer Kit) の3種類のSetが売り出されていました。

DDKはマイクロコンピュータを組み込んだ核となるブロックをもとに各種のロボットを組み立てるセットです。最終的にスターウォーズに出てくる「R2-D2」を組み立てることができます。プログラムは、はじめから組み込まれていました。

RDSは、CPUを組み込んだ核となるブロックに簡

単なコマンド入力ボタンが付いており、それを押すことによりプログラムを組んでいきます。タッチセンサー等を組み込んで簡単なロボットを作ることができます。



RISにはRCX（マイクロコンピュータが組み込まれたマインドストームの頭脳部分）と呼ばれる黄色いブロックがあります。それを中心にしてロボットを組み立て、パソコン上で組んだプログラムを赤外線を用いた転送装置にてRCXに送り込み動作させます。プログラムはRCXコードという開発環境にて行います。パソコンの画面上で、「ON」「OFF」「REPEAT」「センサーの制御」等のコマンドブロックを並べてプログラムを組み立てていきます。



これは児童の指導に使えるのではないかと考えた私はどのようなものか1セット購入しました。当時、私は4年生を担任しておりました。興味のある児童を募り、放課後の教室でロボット作り



に取り組みました。ところが、説明書やチュートリアルはすべて英語でした。簡単な日本語のパンフレットが添えられているだけです。パソコン

の画面に映し出される映像と解説を拙い私の英語力で翻訳し、子どもたちと考えながら取り組みました。始めに組み立てたロボットは「パスファインダー」と呼ばれるモーターを2個搭載した簡単なロボットでした。電流の「ON」「OFF」と回転させる時間をプログラムしまし



た。行って帰る、何回往復させるか、四角形を描かせてみようかと放課後の教室は子どもたちの熱気と目の前で自分たちの組み立てたロボットが思うように動く喜びで包まれました。この経

験をもとに指導していたパソコンクラブの方でも使ってみることにしました。パソコンクラブの予算に組み込み、学校で購入してもらいました。

ただ、ここで問題が生じました。「マインドストーム」「LEGOでロボットを作る」それは何ですかということになりました。区の担当の方に商品のパンフレットを送って説明をし、承認を得ることができました。現在、北区と足立区の区の品目の台帳に「マインドストーム」が登録されていることになりました。



赤西小のクラブ活動では、絵をかいったりホームページを作成するほかにゲーム作りも行っていました。

アスキー社から発売されていた「ツクールシリーズ」のソフトウェアを利用していました。

これにロボット作りが加わることになりました。2～3人でグループを編成し、グループで1セットを使うことにしました。これには女子も興味を示し、ロボット作りに参加してくれました。「マインドストーム」の発売もあり、おりしもロボットブームの始まる時期でもありました。



「ロボコンマガジン」が創刊され間もない頃で、「マインドストーム」等ロボット関連の書籍がいろいろと出版されるようになってきました。児童のロボット作成においてもこれらの書籍をもとに作成

することにしました。書籍に掲載された製作例の中でもっとも興味深かったのは、自分でラインを探しに行くライントレースロボットでした。首を振りながら黒いラインを探し出し道を辿って進んでいく姿はまるで生きているように子どもたちの目に映りました。驚きの歓声がありました。5年生の児童は、書籍をもとに階段を上がるロボットを作成しました。これは「マインドストーム」の開発環境であるRCXコードは使わず特別なプログラムであったため、プログラムの作成は私が行いました。児童の作ったロボットにプログラムを転送し、子どもたちの見守る中スイッチを入れました。動きませんでした。(作成した児童はすでに卒業し大きくなっていますが、これを動かすのが2人の課題となっています。)

赤西小にてこの取り組みをしていた頃に、「視聴覚教育」にてこの活動を紹介する機会がありました。その折には「マインドストーム」という商品名をさけ、LEGOブロック(これも商品名ですが)を用いたロボット作成セットなる表現をしました。まだこのような取り組みは一般的ではなく、概要を述べるにとどめました。

その後、足立区に赴任いたしました。早速予算に

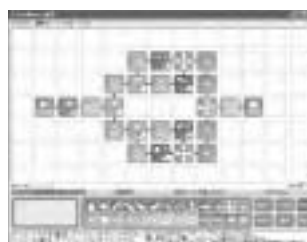


「マインドストーム」を組みパソコンクラブにて利用することにしました。現在、本校のパソコンクラブでは、ホームページ作成、ゲーム作り(ロールプレイングゲーム)、

ロボット作りの3つのグループに分かれて活動を行っています。ロボット作りでは、私がスズキ教育ソフトの主催する研修会に参加したおりに作成した「Cube Cart」も利用してみました。これは、組み立てやすくまたセンサーの性能もよいセットでしたが、プログラムを文字で入力していくため児童にとってはちょっとむずかしかった

ようです。現在発売されている「Cube Cart 2」はコマンドブロックを並べていく開発環境です。

今年は、「マインドストーム」とともにイーケイジャパンの「KIROBO(キロボ)」というセットを使っています。白い穴あきボードに部品をのせて組み立てていきます。ドライバー1本で組み上げることができます。光



センサーが2つ、タッチセンサーが2つ搭載されています。ICONWORKSというコマンドブロックを並べていく開発環境です。プログラムの転送には音声ケーブルを使っています。

3. 実践の成果と課題

今までの取り組みを通して、次の2点が成果としてあげられます。

- ・児童に物事を順序立ててとらえ考えることができるようになってきたこと。何よりチャレンジ精神を向上させることができました。
- ・身の回りの工業技術に目を向け、その理解を深めることができました。

課題としては、週休2日となり時数の関係でクラブ活動の実施回数が少なくなってきたことがあげられます。短期で成果のある取り組みを行う必要があります。

4. 今後の取り組み

最近「二足歩行ロボット」に関心がうつつてきているようです。「マインドストーム」にも二足歩行ロボットのセットが登場しました。二足歩行ロボットにも取り組ませていきたいと思えます。

5. 文献

- ・Let's マインドストーム入門(成美堂出版)
- ・MindStormsの世界(ローカス)
- ・ロボカップジュニアハンドブック(誠文堂新光社)

学視連 分科会1

③

さまざまな教育メディアを活用した実践

—6年総合学習、5年国語学習から—

愛知県岡崎市立藤川小学校 教諭 本田 辰美

1 本校の実践のねらい

パソコンなどのメディアやLANの活用により、多様な学習活動を創出し、興味関心を高めたり、多彩な学習方法習得や表現活動の活性化を図ったりすることで、意欲的・継続的な学習を進め、自ら進んで追究する子を育てたいと考えた。

2 実践の手立てとメディアなどの利用の場

(1) 興味関心を高め、意欲の喚起、継続を図ること

- ・ 事象や事物の出会いとの場
- ・ 課題の焦点化の場
- ・ 学習の振り返りの場

(2) 多様な学習活動をする機会を設け、多彩な学習方法の習得を図ること

- ・ 五感を働かせた体験や活動の場
- ・ 人との関わりをもった調べ学習の場
- ・ 習熟度を加味した個の学習の場

(3) 表現活動の活性化を図ること

- ・ 話し合いや発表の場

3 実践

(1) 6年 総合的な学習「藤川を知り、考え、藤川に生きる」の実践

① 利用したメディア等のねらい（第5・6時）

学区の大気調査の結果をPHS携帯端末のブログに書き込み、現地で他の調査地点とリアルタイムに情報交換することで、学習意欲の向上を図るとともに、効率的な調査活動を行うことができる。

② 指導の実際

ア 単元のねらい

学区の生き物と水や空気などの自然環境との関係を調べることで、一人一人が自然とどのようにかかわり合い、より良い環境にするためにどんな働きかけができるか考え、行動することができる。

イ 第5・6時の指導から

第4時の「自分たちの住む学区は大丈夫だろうか」というテーマから、藤川学区の自然環境を調べることになり、まず空気を調べた。調査をした地点は、6地点で学校から1km以内にある。

第5・6時では、どここの空気がどのくらい汚れているのか調査し、大気と周りの環境や人との関係について考えることにした。

これまでは現地で疑問が生じた場合にはノートに書く

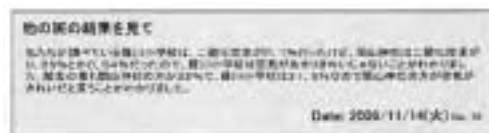
などして、学校に帰ってから調べるという方法をとってきた。しかし、その方法では学習への興味や関心が中断する形となり、集中力をなくしてしまうことになる。また、学校で調べるうちに疑問が出ると、また調べに行かなければならない。

これを解消するために、次のようなPHS携帯端末を使用することにした。

この機器は、パソコン機能に加え、写真撮影や通話もでき、持ち運びも手軽である。

(資料①)

複数のグループに分かれるので、担任が付いていけないグループもある。その場合でもPHS端末があれば電話機能で連絡を取り合うことができ、活動の様子を把握できる利点もある。児童は、調査地点に到着すると、自分たちが空気の調査をしている様子をPHS端末で撮影し、その後、調査結果や気付いたことをブログに書き込んだ。そして、撮影した画像に結果のデータと感想を貼り付けて送信した。中には、ある地点で調べていた児童の班は、他の班のブログを見て、自分たちの調べている場所は二酸化炭素が少ないことに気づいた。すると、他の班の周りの様子を確認するメールを送った。その結果、国道1号の班のデータを見て、酸素の値は木が多くても少なくともほとんど変わらないことに気付いたようだ。PHS端末によってリアルタイムに他の班の結果を見ることができることから、次のような情報の交流が見られた。(資料②)



調査が終了すると、PHS端末の電話で担任に連絡して活動は終了する。調査記録や感想などをブログに書いたものは校内サーバーに蓄積され、パソコンやPHS端末でいつでも閲覧できるようにしてある。

③ 成果と課題

PHS端末の活用により、2つの点が成果として表れた。一つは、学校に帰ってから処理する必要がなく、そ

の場で比較できる場所である。また、他の班のブログを見ることで自分たちのデータを確認したり、他の班に注文をつけたりとできることである。これにより、校外学習の意欲がアップしたことである。児童の表情は明るく、「校外学習は楽しい」と言う。積極的にブログに書き込んだり、他班とこまめに比較を行ったりと意欲的な調査活動ができた。

二つめは、調査活動の効率化である。ある班は、その場で他の班のブログを見て「いつもより酸素が多い」「何で?」とメールでやり取りしていた。また、他の班は、自分たちの酸素濃度が高く、他の班のブログを見て「おかしい」と気づき再度測り直していた。自分たちが測定したデータが正しいかどうか確認し、リアルタイムに解決策を講じた。

課題として、今回のように広い範囲で複数の学習グループによる活動を行うとき、この機器の性能をより生かすための機能設定を考えていきたい。例えば、データ閲覧しながら電話できるなどのマルチタスク化、ブログの書き込みの指定を共通にして1対1から1対全の通信も可能にすること、GPS機能を備えて位置確認することなどがあげられる。

しかし、何よりもこの機器が不可欠となる学習活動の設定を図ること、これによりこの機器で、今までには見られない児童の学習活動を生む可能性をもつメディアにしていけると思う。

(2) 5年国語科「ニュースを伝え合おう」の実践

①利用したメディア等のねらい(第12・13・14時)

- ・電子情報ボードを使ったプレゼンテーションのために、必要な情報を判断、選択、整理し、活用することができる。
- ・電子情報ボードで映像や文字を使用したニュースを発表することにより、事実や自分の考えを的確に表現する力を高めることができる。

②指導の実際

第12～14時では、各グループで作成したニュースを発表し、全員で検討を行った。はじめに、発表の様子をビデオ撮影し、問題の場面を繰り返し再生して検討した。児童が発表で使用する電子情報ボードの大画面は、ビデオカメラで撮影された映像を大きく表示できる。撮影された発表の様子がはっきりし、見る立場に立って自分の目で見ることができた。そして、今まで発表者自身が気付いていなかった良い点や直したい点が数多く出された。「ゲストとキャスターがそれぞれの意見を交わしたり、ゲストに電子情報ボードを操作させたりするなどの役割分担がしっかりできると分かりやすい。」「役割やニュースの内容だけでなく、話すスピードや間の取り方に気を配るとより良くなる。」などである。このような発表後の全員による検討会では、授業時間内には収まりきらないほどであった。

3班の『泥棒侵入事件に気をつけろ!』では原稿作りをする中で、フリップを用いたり、電子情報ボードでグラフを示したりするなど、多様な方法で発表しようとしていた。また、空き巣に対する防犯対策を画用紙に描いてフリップにして発表しようとしていた。しかし、発表に際してもっと大きく出したほうが良いという意見がグループ内であがり、そのフリップを写真に撮り、電子情報ボードで拡大して伝える方法に変更が加えられた。電子情報ボードで発表するため、画面で伝えるという良さとこの機器の拡大機能を生かした内容に仕上がった。さらに、「1年生にもわかりやすい表現の発表を意識する。」という意見が出て、グラフやタイトルなどに使われている文字については、漢字の上に振り仮名をつけたり自分たちが話すセリフで補ったりするなどの工夫を加えられた。聞き手の立場に立った自分たちのニュースの表現の仕方に工夫がみられることができた。(資料③)



③成果と課題

今までは発表というと、作った原稿にあわせて絵を描いた画用紙を提示するという程度であった児童が、電子情報ボードを活用して画像や動画、ビデオ、地図などさまざまな素材を取り入れて発表することができた。このような実践を通して児童の情報収集・発信能力の向上が見てとれた。

この実践を通して、児童はプレゼンテーションソフト、ビデオ、デジカメ、インターネットなど、多くのメディアを利用し、その中から情報を選別し発表するなど、情報活用能力の向上がみられた。

表現力を高めることにおいて今回の実践から一番成果が感じられたのは、毎日の朝の会のスピーチである。今までは自分の考えたことを話すだけで精一杯だった児童が、生き生きとしたスピーチができるようになったこと、スピーチの内容に出てくる物を資料として示したり、会話などを交えたりしながら抑揚のついた話し方をするようになるようになったことである。

また、課題として、本実践はグループ単位の活動であったため、一人一人の力の高まりが見えにくかった。個々の学習記録の方法を探り、一人一人の情報活用能力や表現力を高めるため、個を生かした学習にさらに取り組んでいきたい。

また、電子情報ボードの様々な特性を使いこなし、いっそう効果的な利用方法も探っていきたい。

— ネットワーク環境の活用及び情報モラル等への積極的活用実践例 —

学視連 分科会2

①

小学校における携帯電話やインターネットでの安全な情報の
取捨選択及び適切な情報発信の仕方を知得する学習の実践

港区立神応小学校 教諭 山内日登志

1 安全な情報ネットワーク

近年、パーソナルコンピュータ（以降パソコン）や携帯電話などによるインターネットの普及により、日常生活において多くの利便性が得られている。しかし反面、青少年の健全な育成を阻害する有害な情報を簡単に入手できるという現状があり、傷害・性犯罪・窃盗などに発展する犯罪・事件も増えている。また、児童が被害者としてだけではなく、加害者にもなりうる事件は記憶にも新しく、心身の健康に大きく影響していることが懸念される。そのため、パソコンや携帯電話などの情報ネットワークを介した犯罪被害防止・加害防止は、安全教育の上でも大きな柱となっている。

今後、児童の携帯電話の所持率が上がることが確実視され、安全な情報収集と的確な情報の取捨選択、適切な表現内容と方法で情報発信できるようにする指導の意義は大きいと考える。

そこで今回は、基本となる情報モラルの指導をするとともに、「相手が見えない怖さを知ること」や「文字だけのコミュニケーション時に配慮すること」「コミュニケーションを図るには実際のふれ合いが大切なこと」等について体験的な活動を通して学び、情報を一つのツールとして活用しながら、今後、児童を取り巻く情報社会において、健康で安全に生活するための基礎を身に付けさせたいと考えた。

2 安全への意識・知識・技能

(1) 自他の生命を大切に、

安全に関する意識を高める

情報ネットワークの特徴である「非対面性」や「匿名性」から発生する犯罪の危険性に気付かせるところを導入とし、提示する事例の内容、提示の仕方を工夫し、安全に対する意識を高めていくこととした。

「文字だけのコミュニケーション」によるトラブルの原因を考えさせる場面では、体験的な活動を通し、自分が加害者側になりうることに気付かせ、相手の気持ちに配慮しながら、自分の考えや思いを伝えようとする意識を高めていくこととした。

(2) 危険を予知・回避し、

対処するための知識を知得させる

効果的に資料・教材を提示し、相手が見えない怖さや、文字だけのコミュニケーションでのトラブルの原因を理

解できるようにした。

(3) 適切な行動選択ができる技能を育成する

より本物に近い模擬画面による体験学習や、グループでの意見交換などの活動で得られた気付きや知識は、適切に行動選択する技能に直接つながると考える。また、被害の原因、トラブルの原因を考え、それらを回避する方法を考えていく活動により、技能がはぐくまれていくと考える。

3 指導の工夫

(1) 事前調査の活用

情報モラル教育の習得、情報ネットワークの活用状況を把握し、指導計画の作成・教材の開発に生かす。

また、個に応じた支援をしていく際に、資料として活用する。

(2) 効果的な資料・教材の提示

プレゼンテーションソフトで作成した視聴覚教材を提示することにより、実際の場面に近い模擬体験ができるようにした。このことは、児童の経験による個人差を縮めることにもなる。

(3) 体験的・課題解決的な学習活動の導入

模擬画面を用いた危険なサイトの体験では、自ら考え判断し、まとめる過程が得られ、確かな知識の習得に効果的である。また、一人一人の課題が明確になり、解決のための方法や今後の行動を考えることにつながる。

(4) 日常的な活動の導入

学校生活の中で、情報ネットワークの安全に関する話題を定期的に取り上げたり、授業内容を家庭で話し合うように指導したりする。また、学校・学年・学級通信に授業内容を掲載するなど、家庭への啓発を行う。これらを実施することにより、学習から得られる意識・知識・技能が継続され、実践力の定着につながると考える。

4 小学校中学年での実践例

(1) 中学年の目標

○不適切な情報に出合ったときは、大人に意見を求め、適切に対応する。

○情報発信のルール・マナーを知り、守る。

(2) 単元のねらい

○パソコン、携帯電話のもつ非対面性、匿名性について理解し、適切な行動をとることができるようにする。

- 情報の内容の真偽や意図に注意して、情報を選択できるようにする。
- パソコンや携帯電話を正しく、安全に活用する方法を知る。

(3) 学習指導計画

①「相手が見えないこわさについて考えよう」

<学習活動>

- パソコンや携帯電話の長所・短所を考える。
- 相手が見えない怖さが引き起こす危険について考える。

<評価>

- 非対面性・匿名性から生じる見えない怖さに気付く。

【関心・意欲・態度】

②「なぜ、ひがいにあってしまうのか考えよう」

<学習活動>

- パソコン、携帯電話の模擬画面を通し、被害に至る過程を知る。
- なぜ、被害に遭ってしまうのかを考える。
- 守るべきこと、危険な目に遭った場合の対処の仕方を知る。

<評価>

- 画面を介した相手に対して、自分がとるべき行動について考えることができる。

【思考・判断】

- パソコン、携帯電話の非対面性や匿名性による被害を知り、対処の仕方を理解する。

【知識・理解】

③「文字だけのコミュニケーションについて考えよう」

<学習活動>

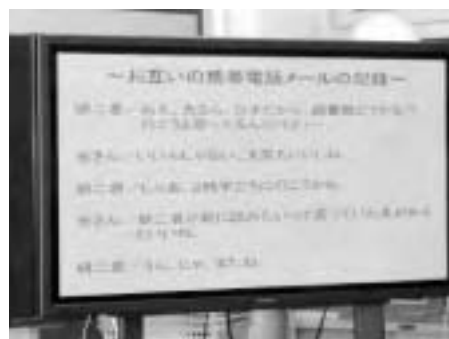
- 言葉によって二通りのとらえ方があるメールのやりとりを模擬体験し、トラブル防止のために言葉の置き換えをする。
- 言葉だけのコミュニケーションがもつ特徴を通して、今後注意していくことをまとめる。<評価>
- あいまいな文章表現は、誤解を招くことを知る。

【知識・理解】

- 文字のもつ特性をふまえ、今後の返信の仕方に生かすことができるようにする。

【関心・意欲・態度】

らに学校・家庭・地域が一体となって実践力をはぐくんでいきたい。



5 今後の取り組み

各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を相互に関連付け、横断的に取り扱い、コミュニケーションの基礎及び情報モラル教育を教育課程に明確に位置付け年間指導計画を立案し、繰り返し行えるよう組織的に取り組んでいく。

学校における指導のみならず、家庭との連携を深めながら、日常生活の中で継続的に指導していく。今後も、情報モラルに関する指導の大切さを学校から発信し、さ

学視連 分科会2

②

教育ネットワークを利用した6年総合学習における
「バーチャル模造紙」の積極的活用
—小中間交流を通して—

愛知県岡崎市立井田小学校 教諭 内田 雅之

1 ねらい

「バーチャル模造紙」というものがある。「バーチャル模造紙」(写真1)とは、ネットワーク上の模造紙上に、子どもが自分の意見や図、絵を書き込み、貼り付けていくことのできるソフトウェアである。



このソフトウェアを総合的な学習の様々な場面で活用すれば、子ども同士がコミュニケーションをとりながら作業を進める過程でお互いに影響し合い、「価値観のすりあわせ」「協調的に取り組む」という体験をすることができる。そういった過程で自身の考えを深め、確立していくことができると同時に、プレゼンテーションにおいてより分かりやすい発表について考えるなど、「伝える」スキルを磨くことができたり、他人の作成したコンテンツを尊重する態度などの情報モラルを養うことができるのではないかと私は考えた。そして以下の4点を具体的な手だてとして考えた。

- ①ボード上での共同作業で同じチームの仲間の考えを見たり、読んだりすることにより、自分自身の考えを確立し、深めていくための手助けとする。
- ②プレゼンテーションの準備作業においてボード上のオブジェクトに対し表示の順序づけを行うことにより、自分たちの考えを順序立てて再構成し、より他人に分かりやすく伝える発表にさせる。
- ③同じ地域に住む中学生にボードへの書き込みをしてもらい、コミュニケーションをとることで刺激を受けるとともに、地域社会の一員として自分の住む地域とも協調していこうとする態度を持たせる。
- ④書き込みの内容、自分と他人のオブジェクトの重なりなどに配慮・調整する経験を通し、自分だけでなく他人の言葉や作品も大事にしようとする態度などの情報モラルを育てる。

2 実践の概要

本実践は、6年生の総合学習の中で行われた。今回紹介するのは、1年間の実践の中でも特にバーチャル模造紙を活用した2学期の実践内容である。

(2) 2学期の実践

2学期には「私たちの町 井田をもっと住みやすい町に

しよう」として、より住みよい町づくりを探る学習を行った。「井田学区は住みよいと思うか」という問いに対し、クラスの児童35人中28人が「住みにくい」と答え、その理由として様々な事柄が挙げられたが、子どもの意識としては「なんとなく」「そんな気がする」程度のものであった。

そこで、理由ごとにグループを作り、現状はどうなっているのかをしっかりと調べさせ、井田学区が抱える様々な問題点に出会わせることで子どもに問題意識をはっきりと持たせたいと考えた。また「バーチャル模造紙」を使って報告書をまとめさせることにより、論理的・科学的な思考する力を身につけるとともに、収集した資料を分かりやすくまとめ、発表する力も身につけさせようと考えた。

子どもたちは、「バーチャル模造紙」での中間報告書作りに取りかかった。班ごとに収集した資料を元に、班のテーマに関する学区の現状と、自分たちの思いを書き込んでいった。

報告書の完成後、中間報告会(写真2)を行った。「バーチャル模造紙」のプレゼンテーション機能を使い、作成したボードをそのまま発表に使用した。本ソフトでは、ボード上の全てのオブジェクトに対して、マウスでクリックするだけで表示の順番を設定できる。子どもたちは班で相談しながら順番の設定を行い、報告会に臨んだ。その後、3学期に向けて個別追究のテーマを決定していった



3 手だてに対する検証と反省

(1) ボード上での共同作業で同じチームの仲間の考えを見たり、読んだりすることは、子どもが自分自身の考えを確立し、深めていくための手助けとなったか。

ボードの作成時には同じボードにログインしているメンバーの書き込みをリアルタイムで見ることができるため、作業中にはチーム内でお互いの意見を読み合い、推敲し合ったり、自分の意見と比較し、良い意見は自分の意見に取り入れる姿が見られた。

「バーチャル模造紙」にはボード上の全オブジェクトについて作成・変更のログを取る機能があり、そこからExcelで文章の編集に関する部分のみを拾ってみたところ、図1のようなログを見ることができた。そしてそれを分析すると、以下の事柄を読み取ることができた。

15:02:29の時点では、C男は学区の松橋町における坂道

時刻	内容
15:00:12	「松橋町のマイナス面を」とらえた書き込みをした。しかしここでC男の書き込みを読んだことにより、坂の積極的な利用法に目を向けるようになり、15:06:51の書き込みを行った。さらにはその書き込みを読んだC男も刺激を受け、15:08:12の書き込みを行っている。
15:06:51	「松橋町のマイナス面を」とらえた書き込みをした。しかしここでC男の書き込みを読んだことにより、坂の積極的な利用法に目を向けるようになり、15:06:51の書き込みを行った。さらにはその書き込みを読んだC男も刺激を受け、15:08:12の書き込みを行っている。
15:08:12	「松橋町のマイナス面を」とらえた書き込みをした。しかしここでC男の書き込みを読んだことにより、坂の積極的な利用法に目を向けるようになり、15:06:51の書き込みを行った。さらにはその書き込みを読んだC男も刺激を受け、15:08:12の書き込みを行っている。

の多さを前向きにとらえ、その利用法を考えていたものの、いい案が浮かばずに悩んでいた。

一方A男は15:00:12まで、松橋町のマイナス面のみをとらえた書き込みをしていた。しかしここでC男の書き込みを読んだことにより、坂の積極的な利用法に目を向けるようになり、15:06:51の書き

込みを行った。さらにはその書き込みを読んだC男も刺激を受け、15:08:12の書き込みを行っている。

この記録からは、A男とC男が互いの書き込みを読み合うことにより刺激し合い、それぞれの考えを少しずつ深めていく様子を読み取ることができる。

このように、ボード上での共同作業は子どもちにとってお互いに刺激を受け、自分自身の考えを少しずつ確立していくための手助けとなっていたと言える。

(2) プレゼンテーションの準備作業においてボード上のオブジェクトに対し表示の順序づけを行うことにより、子どもは自分たちの考えを順序立てて再構成し、より他人に分かりやすく伝える発表をすることができた。

ただ単に模造紙に書いたものを提示する発表では、全ての内容が一度に表示される。そのため、紙面に書いてあることをただ読み上げる発表になりがちで、思考の流れに沿った発表にはなりにくい。しかし本実践では、子どもたちは「何をどんな順番で見せるか」を班で話し合いながら決めていくことにより、必然的に自分たちの調べたこと、考えたことを時間軸上において再構成し、振り返ることができた。実際の授業でも、現状の提示→問題の提起→問題に対する各個人の意見といった基本的な流れをどのチームも踏襲した発表をすることができていた。この点においては、本実践において「バーチャル模造紙」のプレゼンテーション機能を使用することにより効果があったと言える。

(3) 同じ地域に住む中学生にボードへの書き込みをもらい、コミュニケーションをとることで、子どもは地域社会の一員として自分の住む地域とも協調していこうとする態度を持つことができた。

本実践では、センターサーバ上にボードを作成し、本校のすぐ近くにある岡崎市立葵中学校の3年生に閲覧と書き込みを依頼した。(写真3) 以下は書き込みを読んだ後のE男の感想である。

「・・・中学生の人も自分たちと同じことを考えていると分かっておどろいたけど、ほっとした。・・・さいごに『自分たちの住んでるところだから、自分たちにもできることがあったら、いっしょにやりたいですね』って書いてあって、葵中の人たちとも何かいっしょにやれ

るといいなと思った。」この文からは、中学生が自分たちに共感してくれたことにE男が喜びを感じ、さらには協力していこうとする姿を見ることができる。

このように、学区に住む年齢の近い先輩からの書き込みをしてもらうことは、子どもに地域社会の一員として学区の人々と協調していこうとする態度を持たせることにつながった。このように子どもたちの意欲を喚起し、新たな思いを持たせるという点において、中学生からの書き込みは有効であったと言える。

(4) 書き込みの内容、自分と他人のオブジェクトの重なりなどに配慮・調整する経験をすることで、子どもは他人の言葉や作品も大事にしようとする態度などの情報モラルを育むことができた。

「バーチャル模造紙」での作業を始めた直後、子どもたちからよく聞かれた言葉は「重ねないでよ!」というものだった。子どもたちが個々のパソコン上で同時にボード上にオブジェクト枠を作成していると、自分のオブジェクトの上に他の子のオブジェクトが重なって見えなくなってしまうのである。自分が時間をかけて作り上げたせっかくのオブジェクトが邪魔されてしまうことに、初めはいらだちを見せていた子どもたちであった。

しかし、しばらくすると、子どもたちは「重なっちゃったからずらすね。」などと声を掛け合い、オブジェクトの位置やサイズの調整を自発的にし出した。これは自分自身の作ったオブジェクトを大切にすると同様に、他人の作ったオブジェクトを大切にするという態度が芽生えたことの表れと言える。つまり、本ソフトを利用することで、著作権の保護や、他人の意見を尊重するという面での情報モラルを多少なりとも高めることができたと言える。

4 おわりに

本実践で「バーチャル模造紙」を使っていて気づいたことがある。最初は各人1台ずつのパソコンで分散して作業していた子どもたちが、作業が進むにつれて自然に1台のパソコンの周りに集まり、お互いに肉声で意見交換をするようになった(写真5) ことである。その内容は、オブジェクトの重なり合いの解消についてであったり、文章中の言葉遣いについてであったり、プレゼンテーションについてであったりと、バラエティに富んでいた。ソフトウェアには簡易的なチャットの機能が備わっているのだが、子どもたちはバーチャルな世界から飛び出してお互いに生のコミュニケーションをとっていたのである。パソコン上のコミュニケーションを現実の世界のコミュニケーションへと発展させる可能性がこの「バーチャル模造紙」には感じられる。



—ネットワーク環境の活用及び情報モラル等への積極的活用実践例—

学視連 分科会2

③

ネットワークを活用した指導実践

—サーバー蓄積型コンテンツを活用した実践事例—

川崎市立荻宿小学校 教諭 山口 嘉徳

1. 発表のねらい

川崎市教育情報ネットワークには、市内の教員が開発した優れたデジタルコンテンツや教育的価値の高い資料が数多く蓄積されている。また、川崎市立小学校情報教育研究会の活動内容や実践事例、ICT機器を利用する際に便利な資料もサーバに蓄積されている。

今回、ここに蓄積されたコンテンツを紹介したり、コンテンツを活用したりした実践事例を紹介していきたいと考える。

2. 実践・活動の概要

はじめに、川崎市立小学校情報教育研究会の研究テーマをはじめ、今までの活動内容を紹介していきたい。「コンピュータ活用」「学校図書館活用」「放送・映像活用」の3つを土台にして、研究テーマである『自ら学ぶ力と豊かな心を育てる情報教育をめざして～メディア活用で伸ばす確かな学力～』を追究した「川崎の情報教育」を実践してきている。

研究会のWebページには、情報モラル教育を実践した「ひとり一実践」の活動案をはじめ、情報教育のすすめ方のヒントとなる「活動アイデア」や情報機器を活用したい人向けの「知恵袋」コーナーが設けられており、必要

なときにダウンロードできる。また、読書活動年間指導計画や委員会・クラブで活用できる「ビデオカメラの使い方」「アナウンサーになるためのマニュアル」等もダウンロードできる。

これらは、川崎市総合教育センター内のサーバに蓄積されている。

川崎市総合教育センターでは、情報活用能力を高めるために、学校のコンピュータの環境とネットワーク環境を整えるために、平成6年度より市内の21校のネットワーク構築を開始し、順次、環境の整備を推進してきた。平成11年度には、市内全178校とのネットワーク化の整備が完了し、

平成12年度から本格的に川崎市教育情報ネットワーク(KEINS-NET)いわゆるケインズネットがスタートした。

ケインズネットでは、児童生徒のネットワーク利用を可能にすることを重点において整備を進めてきたが、そのほかに川崎市総合教育センターに蓄積されている教育関係の資料・教材データベースの活用などを目的として構築されている。現在、学校と総合教育センター間は、ADSLの1.5Mで繋がっており、ネットワーク機能を利用した電子メールによる情報交換も行っている。メールのID取得者は、およそ5000人にのぼる。

川崎市総合教育センターには、2つのサーバがある。ひとつは、イントラネット用で、各学校からは自動的にこちらに入るように設定されている。児童生徒がメールの練習をしたりホームページを立ち上げたりする際に、学校間でのみ利用できるため、インターネットに出る前の準備段階として安心して活用できる。

もうひとつは、インターネット用で、学校以外の外部からアクセスしたときにはこちらに入るように設定されている。ホームページには、「センター紹介」「研究」「研修」「教育研究会」「市立学校紹介」「教育用コンテンツ」のページがある。

「教育用コンテンツ」には、「学習リンク集」「算数6ヶ国語対訳集」のほかに、市内の教員が開発した「川崎の花」「自然教室へ行こう」「こんな描き方もあるよ!」「おもしろ実験」のデジタルコンテンツが利用できるようになっている。

これらの教育用コンテンツは、川崎市総合教育センターで開発されたものである。総合教育センターでは、設立以来、多様化した教育的諸課題等を踏まえ、川崎の教育の創造と発展に資することを目的とした調査研究を行ってきた。

数ある研究会議の中の、「映像制作研究会」と「情報教育研究会」で情報教育にかかわるさまざまなデジタルコンテンツの開発や研究が行われてきている。



- H18 「はてな？がいっぱいニケ領用水」
- H17 「大山街道を歩いてみよう」
「情報機器による情報活用の実践力の
育成をめざした指導計画の作成」
- H16 「比べてみよう映像編集」
- H15 「うつしてみようビデオカメラ」
「情報モラルの育成をめざした指導資料の作成」
- H14 「自然教室へ行こう」「こんな描き方もあるよ」
「作ってみようビデオ作品」
- H13 「おもしろ実験シリーズ」

総合教育センターの外部用サーバ（インターネット用）では、先に挙げたデジタルコンテンツしか利用することができないが、内部サーバ（イントラネット用）では、「ニケ領用水2006」「比べてみよう！映像編集」「うつしてみようビデオカメラ」「作ってみようビデオ作品」等も授業で活用することができる。



3. 授業実践の成果と課題

単元名 「比べてみよう身近な環境」

活動計画（全32時間）

- ①オリエンテーション
- ②少年自然の家ウォッチングをしよう
- ③八ヶ岳の〇〇博士になろう
- ④自然教室での課題を見つけよう
- ⑤八ヶ岳自然教室の準備をしよう
- ⑥八ヶ岳自然教室に出かけよう
- ⑦八ヶ岳や自然教室のことをみんなに伝えよう
- ⑧振り返りをしよう

授業の分析

子どもの目線に立って課題を設定させるために、担任が以前自然教室へ行って撮影してきたビデオや写真を視聴させたり、総合教育センターのデジタルコンテンツを紹介したりしながら自然教室とは、どのようなものなのかというイメージをつかませた。その後、少年自然の家の施設面と活動面の2つの課題を持って「自然教室へ行こう」のデジタルコンテンツを利用しながら調べ活動を行った。デジタルコンテンツ自体、短い説明とVTRにまとめられているので課題に対して、要点を押さえプリントにまとめることができた。

児童の具体的な課題

- ・バーベキューのやり方は、どうするのだろう
- ・そうじのしかたを知りたいな
- ・布団のしき方やたたみ方をみんなに教えなくちゃ
- ・アストロハウスって何だろう
- ・どんな自然があるのだろう
- ・入所式、退所式ってどんなことをするのか？

学習後の児童のアンケートから（回答31人中）

- ・写真と比べるとビデオは動いているのでわかりやすい。(31人)
- ・操作が簡単で、途中で止めたり繰り返したりして何度も見て学習することができた。(26人)
- ・全体で一斉視聴するよりも個別にビデオが見られるのがよい。(28人)
- ・自然教室に行く前に、事前に八ヶ岳について調べられるのがよい。(25人)

授業の考察とまとめ

アンケート結果から児童は、デジタルコンテンツの利用に対して肯定的にとらえていることがうかがえる。それは、デジタルコンテンツが動画だったからではないかと考える。文字情報よりも映像と音楽中心で構成され、ナレーション入りで説明も入っているものもある。この点が、今回の調べ活動を最後まで集中して持続できた一因ではないかと考えている。

そのように考えてみると、やたら何でもよいのでコンピュータやインターネットを使って課題解決学習をするだけで情報活用能力が身に付くというわけでもないことがうかがえる。児童が本当に魅力のある課題をつかむことができ、児童にとって適当な情報が見つけれられた時に、「調べたり」「まとめたり」「発表したり」する活動を通して情報活用能力が効果的に育成できるのかもしれないと感じた。

現在、総合教育センターと学校間の回線スピードは、ADSLの1.5Mである。今回利用したデジタルコンテンツをダウンロードするには、ギリギリの速度だと痛感した。ダウンロードに時間がかかりすぎると児童の学習意欲も半減しかねない。回線速度を上げることは、ケイブネットの今後の大きな課題であるといえよう。

大切なことは、これから生きていくために必要不可欠の力になってくる情報活用能力を児童に着実に育成するために、児童の情報活用能力を高められるような単元の開発を行ったり、有益なデジタルコンテンツを積極的に利用した学習をすすめていく教員の授業コーディネート力を高めたりしていかなければならないと考える。

参考・引用文献

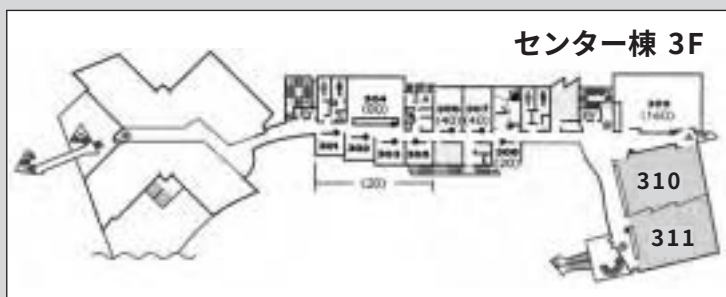
- 情報発信のすすめ 川崎市教育情報ネットワーク
- 川崎市総合教育センター 2000
- 川崎市立小学校情報教育研究会 総会資料
- 川崎市立小学校情報教育研究会 2007
- 川崎市総合教育センター Webページ
- 川崎市立小学校情報教育研究会 Webページ

MEMO

[illegible]

2日目 視聴覚教育 全視連・全国メディア研(高校)一分科会

全視連一分科会.....13:20～ 16:30 センター棟 3F



分科会①

「視聴覚教育施設におけるメディアサービス事業」

全国公立視聴覚センター連絡協議会研修と併催。

- 助言者・吉田 広毅 (常葉学園大学講師)
 佐野 治之 (名古屋市教育センター情報教育部室長)
 司会者・中村 祥一 (千葉県総合教育センターカリキュラム開発部メディア教育班)
 発表者・「郷土画像・映像資料収集、保存、活用について」
 竹内 哲夫 (宮城県登米市視聴覚センター所長)
 発表者・「春日部市視聴覚センターの研修事業について」
 中台 正弘 (春日部市視聴覚センター主査)

分科会②

「地域活性化とメディアボランティア活動」

利用にスタンスをおいた、ICTボランティア、メディアボランティア等の活動事例の発表。

- 助言者・坂井 知志 (常磐大学大学院教授)
 原田 成夫 (北村山視聴覚教育センター所長補佐)
 司会者・村上 長彦 (足立区教育委員会青少年センター青少年事業係長)
 発表者・「ITボランティア『iの手』」について
 財津 敏郎 (大分県「ITボランティア『iの手』」前代表)
 安東 勝範 (大分市情報学習センター指導主事)
 発表者・「視聴覚ボランティア『メディアバンクみるわーく』について」
 村川 慎一 (秋田県「メディアバンクみるわーく理事」)

全国メディア研(高校)一分科会.....13:20～ 16:30 センター棟 5F

実践報告 113:20～15:00

都立砂川高校の教育活動報告

東京都教育委員会のインターネットを利用する「トライネットスクール」事業。
 昼夜3部定時制と通信制を併置するIT推進校の、国語と英語の実践。

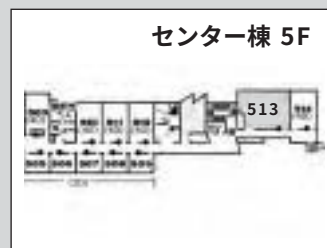
東京都立砂川高等学校 教諭 延味 道都

実践報告 215:10～16:30

都立墨田川高校の実践報告

東京海洋大学と連携する生物の授業。
 海洋大実験室の顕微鏡をインターネットを通じリモート操作し、魚の組織を観察する。
 他にiPodを利用した教材提示について。

東京都立墨田川高等学校 教諭 白石 直樹



全視連 分科会1

①

郷土画像・映像資料収集、保存、活用について

宮城県登米市視聴覚センター 所長 竹内 哲夫

2005年4月に9つの町が合併し「登米市」が誕生したことを機に、市民や教育機関等の「郷土学習」を支援するデジタルコンテンツの充実を図り、視聴覚センター独自のネットワークを新たに構築して、豊富な学習情報を提供する事で「登米市の新しい学習形態の創出」を目指している。

コンテンツの柱は「登米地域に係る資料の収集と保存」そして保存した資料の効果的な「活用」を図るための「郷土コンテンツ制作」に力を入れている。このことは、多くの人々に自らの地域の伝統・文化についての理解を深めてもらうことにより、郷土を愛し、誇りに思う心をはぐくんでほしいという思いが込められています。

2006年度のコンテンツ制作予算は51万円で、自作視聴覚教材34作品のデジタル化と、市民による創作劇公演「夢フェスタ水の里（第1回～第8回）」市内の子供たちによるミュージカル「ドリームキッズ（第1回～第3回）」地域に伝わる市民の創作劇「米岡芝居（第1回～第2回）」の公演記録をデジタル保存すると共に希望者へのDVD貸出と、著作権・肖像権をクリアした作品をインターネットで公開している。

公開は、自作視聴覚教材等の動画映像25作品、登米圏の四季（写真）122枚であるが、今後も継続して取組んで行く視聴覚センターの根幹事業として位置付けている。

又、ホームページでの公開に当たっては、利用者の通信環境を考慮して、ブロードバンド（ADSLなど）だけでなく、ナローバンド（ISDNなど）からでも利用いただけるように配慮した。

事業の背景には、教材性や史料的高い合併前の映像資料等が、制作当時のメディアのまま、あまり利用されずに埋もれていたため、その状況を放置しておくことは、郷土の歴史を知る上で貴重な映像資料等が劣化し、消滅の危機にさらされる事になるので、収集・保存・活



用を柱に地域のコンテンツ制作と、それをインターネットで公開することにより、従来の視聴覚教育という堅苦しいイメージを払拭して「いつでも・どこでも・だれもが」自由に利用できる環境を整え、後世に継承しようと取組んでいるものである。



この事業の第一歩は、2005年度にWebシステムを新たに構築し、視聴覚センターのホームページをリニューアルして、自作教材や史料的価値の高い記録映像等を「活用」するための環境整備からスタートしている。

システム構築に当たっては、登米市企画部が合併と同時に立ち上げた情報系のポータルサイトを利用させてもらいたいと要請したが、セキュリティ上の難色を示されたため、独自のネットワークを構築した事で、豊富な情報を発信する事が可能となった。

現在は市内小中学校全校のホームページ公開のための関連予算も視聴覚センターに予算措置されていることから、将来は登米市教育委員会のポータルサイトに発展させ、その中で視聴覚メディアサービスを発信することによって、本当に必要とされる教育機関の一翼を担う事ができると考えている。



インターネットによる資料の公開に当たっては、当然のことながら著作権や肖像権に細心の配慮が必要となる事から、史料的価値の高い貴重な作品であっても、すぐには公開が難しいものも多くあり、これらの作品についても、時間をかけてでも公開できるようにしたいと考えている。

又、この経験を踏まえて、2006年度からは著作権契約や、肖像権の承諾を得た上で進めており、インターネットによる公開を前提に「郷土学習教材」を制作している。

今後は、登米市の今昔の姿を、デジタル化した画像・映像で記録した映像による地域文化のデータベースを作ることにしており、市内全域からの「記念誌」や「映像資料等」の収集に着手したところである。

【資料収集状況：07年9月末】

記念誌	62冊
ビデオ	17巻
写真	66枚

—視聴覚教育施設におけるメディアサービス事業—

全視連 分科会1

②

春日部市視聴覚センターの研修事業について
—学校教育へのサポートを中心に—

埼玉県春日部市視聴覚センター 主査 中台 正弘

1 はじめに

春日部市は、関東平野のほぼ中央、埼玉県東部に位置している。平成17年10月、旧春日部市と旧庄和町が合併した新生春日部市は、人口約24万、県東部の中核的な役割を担う「人・自然・産業が調和したふれあい共生都市」として大きく発展しつつある。

春日部市視聴覚センター（以下「当センター」という）は、視聴覚教育を通じて市民の生活文化と知識教養の向上及び学校教育と社会教育の振興を図ることを目的として、平成2年に開所した。「学習情報センター／教材センター／研修センター」の3つの機能を施策の柱としている。今年度より生涯学習推進業務を併せて行うことになり、組織・運営面で新たな段階を迎えたといえよう。（所属職員7人、うち指導系2人）

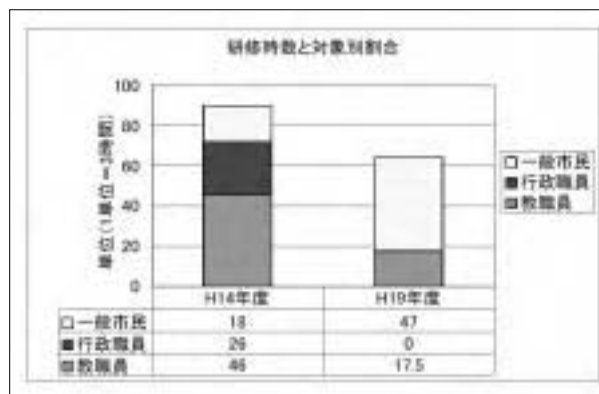
一方、昨年（平成18年）12月に教育基本法が改正され、学校教育だけでなく社会教育もまた大きな変動の時期にさしかかっている。本稿では、特に学校教育へのサポートに焦点を当て、社会の情報化が加速度的に進展する状況の中、新たな時代の視聴覚センターと学校教育との関わりについて考察していきたい。

2 教職員対象研修の現状と変化

近年、学校現場にコンピュータが広く浸透し、コンピュータは学校の中ですっかり日常化した。

文部科学省の統計を見ると、平成18年3月現在（本稿執筆時点で最新の数値）で「コンピュータを操作できる教員」の割合は96.9%、「コンピュータを使って教科指導等ができる教員」の割合は76.8%である。また、校内におけるコンピュータ関連の整備状況を平成14年3月と平成19年3月との比較で見ると、コンピュータ1台当たりの児童生徒数は11.1人/台から7.3人/台とやや頭打ち傾向にある。これに対し、校内LAN設備率は同じく21.1%から56.2%に、光ファイバ回線によるインターネット接続率は12.8%から55.5%になるなど、ネットワーク環境の大幅な向上が著しい。

そうした中で、当センターの諸事業もニーズの変化に合わせて少しずつ見直しを行ってきた。次のグラフと表は、平成14年度と今年度（平成19年度）のコンピュータ関係研修の実施状況を比較したものである。



教職員対象研修の内容と時間数

H14年度

研修名	単位	回数	総時間数
計算機・初級	1	4	4
計算機・中級	1	4	4
計算機・上級	2	2	4
ワープロ活用	1	2	2
プレゼン	2	1	2
グラフィック	2	1	2
IT活用	2	1	2
教材作成	2	1	2
研修員(総合)	2	1	2
初級(総合)	4	1	4
研修員	4	3	12
研修員	2	3	6
計		24	10

H19年度

研修名	単位	回数	総時間数
計算機・初級	0.5	1	0.5
計算機・中級	0.5	1	0.5
計算機・上級	1	1	1
ワープロ活用	0.5	9	4.5
実践づくり	0.5	3	1.5
プレゼン基本	0.5	3	1.5
プレゼン応用	0.5	3	1.5
研修員	1	1	1
研修員(初)	1	1	1
研修員(中)	1	2	2
研修員	0	1	0
計		19	12.5

※「1単位＝3時間」である

(1) 研修時数と対象別割合の変化

コンピュータ関係研修全体について平成14年度と今年度を比較したとき、大きく2つの変化を読み取ることができる。第1は、研修総時数の減少である。平成14年度が計90単位（270時間）であるのに対し、今年度は計64.5単位（193.5時間）と約30%減である。この背景として、情報化の進展に伴い、量よりも質の高い事業内容が求められるようになったことが大きい。学校ないし教職員対象の研修についていえば、例えば「学校に直接出向いて行う研修」の充実など、研修の在り方そのものを多様化

させている。

第2は、行政職員・教職員中心から一般市民対象の研修が中心となってきたことである。春日部市では、行政事務の基幹部分についてのIT化がここ数年で完了し、平成14年度当時数多く実施されていた行政職員対象の研修も、一応の役割を終えた。一方、市民からはコンピュータ関係の研修に対するニーズが高まってきた。それを受け、「市民パソコン講座」は年ごとに開設講座数を増やしながら現在に至っている。

(2) 教職員対象研修の変化

次に、教職員対象研修に絞って平成14年度と今年度の状況を比較すると、次の4点が指摘できる。

第1は、啓発的な役割をもつ「総合的な研修」が行われなくなったことである。前述のように、昨今の学校はコンピュータの活用が日常の風景となっていることから、「パソコンとは何か」といった研修はその役割をほぼ終えたといえる。

第2は、個々の研修の実施単位（時間）が短くなっている点である。平成14年度の場合、多くの研修が1講座当たり2～4単位（6～12時間）で計画されているのに対し、今年度は「ICT活用研修」を除き0.5～1単位（1.5～3時間）で1講座となっている。

教職員対象研修は、そのほとんどが夜間、自主的に（＝勤務の一環としてではなく）参加する形をとっている。したがって、昨今のいわゆる「多忙化」の中で、長時間の研修に参加することが難しいという教職員の声に応えたものである。また、研修への幅広いニーズに対応するため、個々の教職員が必要と感じる内容をワンポイント的に研修できる1時間半程度の研修（当センターでは「ハーフ＆ハーフ研修会」と呼んでいる）を拡充している。

第3は、「ソフトウェアの操作研修」から「具体的な活用の場面を想定した活用研修」への転換である。平成14年度では各講座で使用するソフトウェアはほとんど1種類のみであり、当該ソフトウェアの操作を習得するための研修といった性格が強かった。これに対し、今年度は「賞状づくり」や「成績個票のグラフ化」など具体的な作業課題を設け、それを実現するために複数のソフトウェアを組み合わせて活用するといった研修が全体の半数以上を占めている。

第4は、新たな時代のニーズに応える研修内容や方法の工夫である。例えば「ネットワーク管理者研修」は、管理職を対象にネットワークの基本的な知識や情報セキュリティの問題を中心に研修するものである。なお、この講座は作業・体験的な内容を重視する方向性で改善を進めてきている。

また、「ICT活用研修会」は、今年度から埼玉県教育委員会との共催で実施しているものである。本研修会は、コンピュータの操作や活用に不安の見られる教職員を対

象に、授業におけるICT活用を中心テーマに計3日間で実践的な研修を進めている。

以上をまとめると、教職員対象研修におけるこの5年間の変化は、次の2点に集約することができよう。

- ・「教職員全体を画一的にレベルアップする研修」から「個々の教員のニーズに対応した研修」へ
- ・「操作を学ぶ研修」から「実際に活用できる研修」へ

3 教育改革とICTへの新たな期待—まとめに代えて

昨今の教育改革の中で、学校と家庭・地域との連携が重視されている。新教育基本法では、学校と家庭・地域等の連携・協力が努力義務として新たに定められた。また小・中学校設置基準では、連携の基盤となる学校からの情報提供を義務づけている。

授業の質の向上だけでなく、学校からの情報発信手段として、インターネットをはじめとするICTの活用は大変有効である。しかし、「学校組織全体としてのICT活用能力」に注目し、その向上を目ざす取り組みはこれからといえよう。

当センターでは「ICTを中心とする学校全体の情報発信力」を向上させるための試みを少しずつ始めている。例えば、従来のホームページ作成研修だけでなく、市内の小中学校を直接訪問し、ホームページ作成担当者を対象とした研修を新たに実施した。各校の実情に応じた技術的な支援はもとより、学校のホームページを定期的に更新できる職員組織の整備や作業の分担のしかたなどもアドバイスしている。また、ネットワーク管理者研修においてウイルス被害の実例などとともに対策例を具体的に指導することにより、各学校が自信をもって情報提供を行えるようバックアップしている。さらに、表計算（上級）研修では、学校評価の結果処理に役立つ「表計算ソフトでの処理を見通したアンケート調査実施のノウハウ」なども学べるよう計画している。

一方、今年度より当センターと生涯学習推進業務が統合されたことを受け、例えば生涯学習に関する人材情報登録制度を活用して学校教育との連携がより円滑に行われるよう支援していくなど、当センターが学校と地域社会との橋渡し役を務める方向性についても検討していきたい。

このように考えていくと、「社会教育に足場を持ちつつ、学校教育とも積極的に連携していく」という視聴覚教育の一貫した立場は、今また新たな意義を持つことになるのではないだろうか。

—地域活性化とメディアボランティア活動—

全視連 分科会2

①

I Tボランティア「iの手」について

大分市 I Tボランティア「iの手」 前代表 財津 敏郎
大分市情報学習センター 指導主事 安東 勝範

1 発表のねらい

I Tボランティア「iの手」は、大分市情報学習センターで組織されたボランティア団体である。

「大分市情報学習センター」（以下センター）は、センターにおける教室の充実と市民の地域における学習機会の拡充を目指すため、2004年度より市民を対象に「I Tボランティア養成講座」を毎年1回開催し、修了者を「iの手」の会員として登録するシステムを確立した。

「iの手」はセンターの支援のもと、2005年度より本格的なボランティア活動を開始し、現在に至る。市内13の地区公民館で開催している「パソコン入門教室」は好評で、2007年度は受講生の要望も踏まえ、公民館毎に実施回数や内容を変えて活動している。

「地域活性化とメディアボランティア活動」の一事例として、当ボランティア団体の活動を紹介することが、地域社会における「I Tボランティア活動」のあり方を問う参考になれば、これは会員の喜びです。

2 実践・活動の紹介

(1) I Tボランティア活動の動機

同センターの養成講座への呼びかけに対して、毎回多くの市民が応募し、修了者は、ほぼ全員が「iの手」に登録している。会員のボランティア活動への参加の動機を整理すると図-1のようになる。会員はボランティアとしての活動ばかりでなく、パソコンに関する知識を学びたいという要望が極めて高いのが現状である。

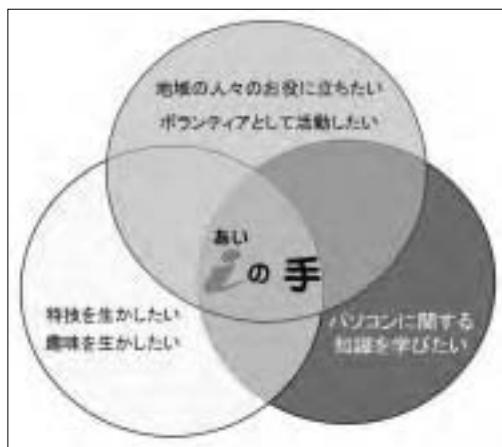


図-1 ボランティア活動の動機

(2) 組織

ボランティア活動を行う上で組織作りは必須の要件であり、十分な協議により組織作りを行った。

図2に現在の「iの手」の組織図を示す。



図-2 組織図

◆運営係会議

各班の代表2～3名から構成し、代表世話人及び副代表世話人・幹事はこの中から互選によって選出している。会議はセンターの職員参加のもと、月1回程度開催し、スケジュールの確認、研修の企画運営等活動の円滑化を図る。

◆活動班

「iの手」会員114名は、居住区を考慮して地区公民館別にA～F6つの班を編成し、班ごとに担当地区公民館（図-2下図）とセンターで活動している。

◆テキスト編集委員会

公民館で使用するテキスト・教材の作成、編集・改定を行う委員会である。

◆ホームページ運営委員会

ホームページの作成・運営を行う。運営係会議や活動班等と連携し、常に最新情報に更新する作業を支援している。

◆動画配信グループ

大分市生涯学習情報「まなびのガイド」に掲載する動画教材の制作を行うグループ。センターの過去のアナログ教材のデジタル化も行う。

◆映像サークル

写真・動画の撮影・編集等に関する同好会。作品は年1

回発表会を開催し、動画作品はホームページ上で公開中。

(3) 活動の概要

活動はセンターのパソコン教室や情報体験学習のサポート、大分市内13地区公民館でのパソコン教室の開催、各種研修会の実施、大分市の生涯学習情報「まなびのガイド」へ掲載する動画教材の制作等である。中心となる活動は公民館でのパソコン教室の開催である。H19年度の計画を次に示す。

●パソコン入門教室

13地区公民館×3シリーズ/5日間コース

●はがき作成教室

13地区公民館×1シリーズ/4日間コース

【パソコン入門教室の概要】

①指導体制 リーダー1名 サブリーダー2～5名

②受講生 各教室10名、初心者対象

③受講料等 市の受講料として300円/日/人=1500円を徴収。

④スケジュールと内容

- ・1日目 パソコンの構成、電源の入れ方、マウス操作などパソコンの基本操作
- ・2日目 ワードプロソフトによる文字、文章の入力、
- ・3日目 文字の修飾等とインターネットへの接続
- ・4日目 電子メールの送受信、ネチケットについて
- ・5日目 4日間で学んだ内容についてのフォローアップの日。受講生はパソコン持ち込み可。アンケート結果は、今後の活動計画策定の参考資料としている。



写真-1 公民館でのパソコン入門教室

⑤その他 交通費として3人分3,000円/日が市より活動班に支給される。

(4) 会員間における情報の共有

会の円滑な運営にとって、情報を共有するシステム作りが、大きな課題であったが、ホームページ運営委員会を発足させ、この問題を解決した。ホームページはスケジュール管理情報の他、会の活動状況のページ、研修会等の資料をダウンロード出来るページ、会員の静止画・動画作品の投稿ページ等を設け、会の円滑な運営と情報の共有化を図っている(図-3はトップページ)



図-3 iの手ホームページ

3 実践の成果と課題

公民館で行うパソコン教室は、今までに延べ4000人を越える市民が受講し、「初心者に優しいパソコン教室」と極めて好評である

時期によっては、センターのパソコン教室のサポートと重なり、相当に過密スケジュールの中で活動を行ってきたが、この難局を運営係を中心とした会員相互のチームワークで乗り切り、活動をとおして多くの市民とふれあうことができたことが最大の成果である。

また、「会員の学びたい」に答えた各種研修の実施は、会員のITに関する知識のスキルアップに役立っている。

一方で、家庭の事情や体調を崩す等、活動半ばにして会を退会する会員が、毎年十数名いることは避けられない事実である。各公民館での教室を円滑に行うためには、ある程度の人数が必要となる。パソコンに関する知識を活かして社会貢献をという市民を掘り起こし、継続的に「ITボランティア養成講座」を開催し、会員の数を維持していくことが何としても必要である。

4 今後の取り組み

活動開始から、3年を経過しようとしている。多くの課題が会員の努力とセンターの支援によって解決されてきた。市民の要望も入門教室から実用的な講座の開催を要望する声が出始めている。現状では、これ以上新しい講座を増やすことは困難である。

これに対処する一つの試みとして9月より、センターの各種講座、公民館のパソコン教室受講生を対象に、センターで週1回「初心者のためのパソコン相談教室」を開き、市民のパソコンに関する「各種相談」に応じている。

来年度はセンターから遠い東部地区など数箇所の公民館でパソコン相談教室を開き、市民とのふれあいの場を広げることを当面の目標としている。

全視連 分科会2

②

視聴覚ボランティア『メディアバンクみるわーく』について

秋田県 メディアバンクみるわーく 理事 村川 愼一

◆秋田県 湯沢市・雄勝郡の紹介

湯沢市・雄勝郡は秋田県の南東部に位置し、岩手県・宮城県・山形県に隣接し、秋田県の南の玄関口にあります。

湯沢・雄勝地域は1市1町1村で構成され、3市町村の人口が約7万7千人の地域です。

東北地方の中央部を南北にのびる奥羽山脈の麓に位置し、雄大な自然のもと、農林業を基幹産業としております。

豊富な温泉群、東北の灘といわれ「酒造り」や「稲庭うどん」の生産地でもあります。

また、古くからの伝統と四季おりおりの風情とあいまって豊かな情緒をかもし出す観光地でもあります。

春の訪れと共に、小野小町生誕の地といわれる小野地区では「小町まつり」が開催されます。

夏は、「七夕絵どうろうまつり」が開催され、類を見ない絵どうろうの幽玄さと、また、国の無形文化財に指定されております「西馬音内盆踊り」は観衆を幻想の世界に引き込みます。

秋の紅葉時には、「小安温泉峡の大墳湯」と「栗駒山」は大勢の観光客で賑わいます。

冬は、雪国ならではのロマンに満ちたお祭りが各地で開催されます。「ゆきとびあ」は、古式豊かな馬そりの花嫁がキャンドルロードを登って行きます。また、400年の歴史を持つ「犬っこまつり」もあります。

是非、機会をみておいでいただければ幸いです。

◆視聴覚ライブラリーの体制

視聴覚ライブラリーは、湯沢雄勝地域に2カ所あったライブラリーを統合し、昭和50年に「湯沢雄勝広域市町村圏組合視聴覚ライブラリー」として誕生しました。

ライブラリーの運営につきましては、視聴覚教育施設

としての整備は無く、社会教育施設の一角を間借りし、教材・機材の貸出し業務をはじめとして視聴覚関連の各種講習会を実施しております。

また、各種講習会の実施にあたりましては、視聴覚ライブラリーの単独主催はほとんどなく、ネットワークを駆使し、「学校視聴覚教育研究会」や「みるわーく」との共催により実施しております。

運営状況としましては、近年の財政ひっ迫により視聴覚教材や機材整備・人的配置にも拍車をかけて弱体化している中で、「学校視聴覚教育研究会」や「みるわーく」との共催で進める事業は、大きな力になっております。

秋田県全体では、市町村合併以前は、11地域に有りました地域視聴覚ライブラリーも市町村合併後は、3地域だけが生き残ったような状況にあり、秋田県全体が停滞している状況にあります。

◆メディアバンク・みるわーくの設立

視聴覚ライブラリーの運営の中に、各種委員会が設置されております。

運営委員会、教材開発委員会、教材選定委員会、技術指導委員会、情報委員会と5委員会がそれぞれの役割分担のもとに、主体的に進められております。

この委員会の中で、「みるわーく」の前身である教材開発委員会の設置は、市販されていない分野の教材制作及び地域を素材とした映像を制作し、学習資料として貸出をするという目的でした。

委嘱を受けた委員はシナリオから映像収集、制作へと一貫して一人で年間1作品を制作するという体制で進められており、委員は、それぞれ本業をもっており、本業時間外での教材制作は、委員にかなりの負担がかかります。

このような状況では、教材開発委員の後継者がなかなか見つからず、人材確保に苦慮する状況もあり、委員会が発展的に解消されることとなりました。

発展的に解消された元委員が母体となり、地域の住民の方々を対象に視聴覚ボランティアを募集したところ、写真撮影やスライド制作、ビデオ制作、パソコン操作、ナレーション、昔語り等の特技を持った方々が集まり、平成10年に映像ボランティアグループ「メディアバンクみるわーく」が誕生しました。



◆実践の過程と成果

視聴覚教材制作技術を持った精鋭が集まり、それぞれの特技を活かすために、写真部・ビデオ部・コンピュータ部の3部に集約し、地域の今昔に関する視聴覚資料の作成・収集・保存がスタートしました。

活動は各部ごとに進められ、写真部は、地域の「まつり」「次世代に残したい風景」をテーマに写真に納めております。今まで、撮影した作品は、110点になりました。収集した写真は、年間4万人ほどの方々が利用する「広域交流センター」に展示しており、センターに来られたほとんどの方々が足を止め、見ていただいております、やすらぎや地域再発見資料として喜んでいただいていると思っております。展示後は事務局で保存しております。

ビデオ部は、地域の「野鳥」「アイヌ語」「山野草」「蝶」「自然」「歴史」等をテーマにスライドやビデオ、DVDにより教材を制作しており、129作品が制作されております。この作品につきましても「広域交流センター」に展示し、貸し出しを行い、住民の方々に見て頂いております。

コンピュータ部の活動としては、パソコンに関する最新情報の提供や講習会の際の講師を努めるなど住民の方々と触れ合いながら、地域への定着を図っております。また、「みるわーく」のホームページを作成し、会活動や視聴覚ライブラリーの情報提供も行っております。

以上、3部の活動状況ですが、映像収集のために、撮影現場に何度も足を運びながらの撮影と資料・情報収集等、映像制作にかかる時間は膨大であり、会員の地道な作業に敬服しております。

成果としては、今まで、地域に関する映像は、ほとんど見ることは出来ませんでした。が、会員が制作された映像資料は239点と沢山の郷土映像資料を収集することが出来ました。また、地域映像を収集することにより、見慣れたものに対する新しい発見や再認識や地域に対する愛着など、資料収集を通して得られるものが沢山ありました。

制作された映像資料は、地域学習、地域PR用として子どもから一般の方々まで広く利用されております。利用されることにより、視聴した方の感想や励ましが制作者の励みとなり、技術向上につながるという相乗効果が生まれ、会員の技術も向上しております。

このような活動が認められ、日本視聴覚教育協会・視聴覚功労者5名、文部科学大臣賞・視聴覚教育部門において3名が授賞するなど自他共に認められております。

さらには、地域から制作要望も寄せられるようになりました。

例えば、平成19年度は秋田県が国体開催地であります。湯沢雄勝地域にも沢山の選手の皆さんや関係者が来てくれますことから、地域をビデオで紹介したいとの要望があり、会員が作成し、地域内の拠点施設約40箇所に配布しております。



また、近年、小野小町の生誕地ということで、訪れてくれる方が多くなりましたが、予算が無くビデオが制作されておられませんでしたので、観光案内人からの要望で小野小町の紹介ビデオを現在作成中です。

他にも、写真撮影やビデオ制作及びコンピュータ関係の指導の依頼も寄せられるようになってきており、徐々に地域にも浸透していると感じております。

◆今後の課題と取り組み

視聴覚の拠点となるライブラリーの運営が年々弱体化する中で、「みるわーく」の活動が視聴覚教育事業推進に大きなバックアップを果たしていると思っております。

地域を見渡しますと、時代の変遷と共に次世代に残さなければならない郷土資料が山積しておりますが、完全な収集には至っておらず、今後も会員間の交流を大切に、更には会員の技術や知識を活かし、地域に根ざし、ネットを巡らせながら、地域映像資料の制作・収集を進めていきたいと思っております。

郷土を愛する人材の育成の観点からも地域に貢献できる会でありたいと念願するところでです。

また、視聴覚映像制作のボランティアグループは、全国でも珍しいケースと聞いておりますので、今後も会活動継続のために、如何に住民に浸透させ、更に意義あるものとするための運営方法や方向性を模索していかなければならないと思っております。

継続のためには、会員の加重負担を避け、それぞれの特技を、どのようなネットワークの基に融合させていくか、話し合いを重ねながら、会員が動きやすい環境づくりのために事務局がフォローすることが最も重要と思われます。

収集された映像資料を保存するだけでなく、いかに住民の方々に見て、知ってもらうか重要なことでありますので、ホームページや広域広報、ライブラリー情報誌等への掲載や施設での展示、口コミ等様々な角度からの周知浸透を目指しております。

※みるわーくとは

「みる」はイタリア語で千、「わーく」は英語で働くで、たくさん(千)働くことと、視るをかけている。

全国メディア研 （高校）—分科会

①

ICTを導入した授業

東京都立砂川高等学校 教諭 延味 道都

1. はじめに

学習論は、20世紀初頭から21世紀にかけて大きく変遷してきた。20世紀になって以来3度の変遷を経ているという指摘がある。「行動主義」「認知主義」「状況論革命」である。一方、学習を支える技術、いわゆる学習支援技術も20世紀末から21世紀初めにかけて大きな変化の波を受けることになった。それがICT（Information and Communication Technology）である。本発表は、学習論の変遷の中から生まれた「インストラクショナルデザイン」の考え方とICTを授業に導入した報告である。

2. インストラクショナルデザイン

今期の授業計画に取り入れたインストラクショナルデザインについて、Dick & Careyモデルは、教育ゴールが設定される学習領域（domains of learning）を、言語情報（verbal information）、知的技能（intellectual skill）、運動技能（psychomotor skill）、態度（attitude）の領域に分類する。本稿もこれにしたがっている。

①「教育ゴール」という考え方

インストラクショナルデザインの最初のステップは、インストラクションが終了したときに学習者ができるようになることを定義することであり、教育ゴールを設定することである。教員が教育ゴールを設定する際には、多くの指導案に見られるように、内容に関して「知る」とか「理解する」「気づく」という言葉が含まれることがほとんどである。しかし、これらの言葉によって記述されたゴールは非常に漠然としたものであり、漠然とした言葉で記述されたゴールは、そのゴールが達成されたのかどうかの判断をすることを難しくする。そのゴールが達成されたのかどうかの判断は外に現れる行動によって測定されなければならない。こうして学習者の行動を観察するためのスケールが作られる。では、「行動を明確に記述した教育ゴール」とはどのような形で記述されるのだろうか。たとえば、英語について言えば、「不規則動詞について理解する。」「不規則動詞と規則動詞の違いに気づく。」といった記述よりも、「不規則動詞の変化を書くことができる」という記述の方が明確であり、学習者の行動によってゴールの達成を確認することができる。

②「上位ステップと」「下位ステップ」

教育ゴールへの過程はいくつかのステップに分割される。しかし、そのステップが大きいと感じられるときに

は下位ステップに分割する必要がある。一時間の授業時間で教科書の一つの単元を終了させるのは、誰しもが困難であると考えられる。すると、その単元はいくつかのステップ（授業時間）へと分割される。そしてその時間ごとに教育ゴールが設定されるが、その教育ゴールに1ステップで到達する場合もあれば、数ステップを必要とする場合がある。

③「上位スキル」と「下位スキル」

下位スキルとは、あるステップを達成するために、学習者が既に学んでいなければならないこと、できなければいけないことを示すものである。古文の授業で品詞分解ができるようにステップを構成したとしよう。しかし、学習者が文法的な知識を学んでいなければ、このステップを達成することは困難である。学習者が必要なスキルを習得していないのであれば、これを指導しなければ学習効果もあがらず、またゴールも達成できない。

3. 著作権とコンテンツ

ICTを授業に導入するにあたっては、著作権について理解することが必要となる。本発表では、著作権に触れながら、本校通信制課程が作成した学習支援用コンテンツを紹介する。

尚、紙面の都合から、参考文献については省略する結果となったが、参考とさせていただいた方々に御礼申し上げます。

全国メディア研
（高校）—分科会

②

インターネットを通じた東京海洋大学の顕微鏡利用
およびiPODを利用した教材提示による授業

東京都立墨田川高等学校 教諭 白石 直樹

1、概要

東京海洋大学の羽曾部正豪准教授により、「受講者の意向を反映させ解説講義が可能なディスカッション顕微鏡による学習は、生物教育における最も優れた教授法（対話教育）のひとつではあるが、現有設備としては未だまれである。そこで、現在の情報技術を効果的に学校教育の場へ導入する手段として、遠隔操作型の顕微鏡の利用とそのITシステムに基づく対話教育の実践を試みている。」という案内を頂いた。実際に操作し、授業を行ってみると、大学の研究者の指導のもと、適切に教材利用ができる方法の一つとして、リモート操作は有望であろうと思われた。この方法は、同一の画面を見ながら助言を受けることができる。また、離れた教員間でも同一画面を見ながら協議できる利点がある。実際に授業で利用した結果を報告し、今後の可能性について考えたい。また、多様化する視聴覚教材の提示方法として、アナログのテレビを提示装置として使うことができるiPODを使った授業についても紹介し、ブロードバンド時代の視聴覚教材の扱いかたの一例として、ビデオポッドキャストの利用と充実を訴えたい。

研究経過 多細胞動物について、細胞、組織、器官の観察ができる優れた教材としてマクロ染色標本（図1）がある。これは、東京海洋大学の羽曾部准教授によるもので、市販はされていない。



図1 ニジマス稚魚のH.E.染色標本
（提供 東京海洋大学 羽曾部 正豪）

多くの高校教員が興味関心を持ちながら、授業に用いる困難さを感じたことと思われる。ただ眺めても何を見て良いのかわからない、何を見ているのかを知るのも簡単ではない。しかし、細胞と組織器官の関係は一目瞭然であり、他に類を見ない。今回、東京海洋大学の顕微鏡を操作（図2）し、見るべき部位を生徒に指示し、事前

および当日にも研究者に質問をしながら授業を進めることができた。対象は墨田川高校の2年生160人で、授業は文系、理系それぞれの選択必修（物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰから1科目）7講座である。



図2 ニコン クールスコープの操作画面

2、成果と課題

本校では100Mの速度を共有するLAN経由で2人同時にストレス無く利用できた。同時展開のクラス間でも、それぞれやりとりが可能である。生徒は、マクロ組織標本に驚き、大学の顕微鏡を操作できることにも感心していた。事前に画面を取り込んで、印刷しておくことも可能であり、授業プリントの一部に利用できた。要所を記憶させて瞬時に移動することもできるので、時間配分によっては肝臓、えら、網膜などの要所のみつまみ食いもできる。今回の授業では携帯電話でのやりとりとなったが、メッセージなどの利用でリアルタイムにやりとりできるはずで、現在、試行をお願いしている。羽曾部准教授からは、「固定IPアドレスの取得など、現状が抱える問題は多大ではあるが、実体に裏打ちされた情報技術とその展開は生徒の学習進度と適時性から今後の効果的な方法と考える事ができた。」ということである。また、速度は遅いがウィルコの端末でも利用できることが確認できたので、全国での利用可能性を考え、今回の実演はウィルコのPHSで接続して行う予定である。

視聴覚教材・機材等展示研究会

第43回「教育の近代化展」出展協賛社

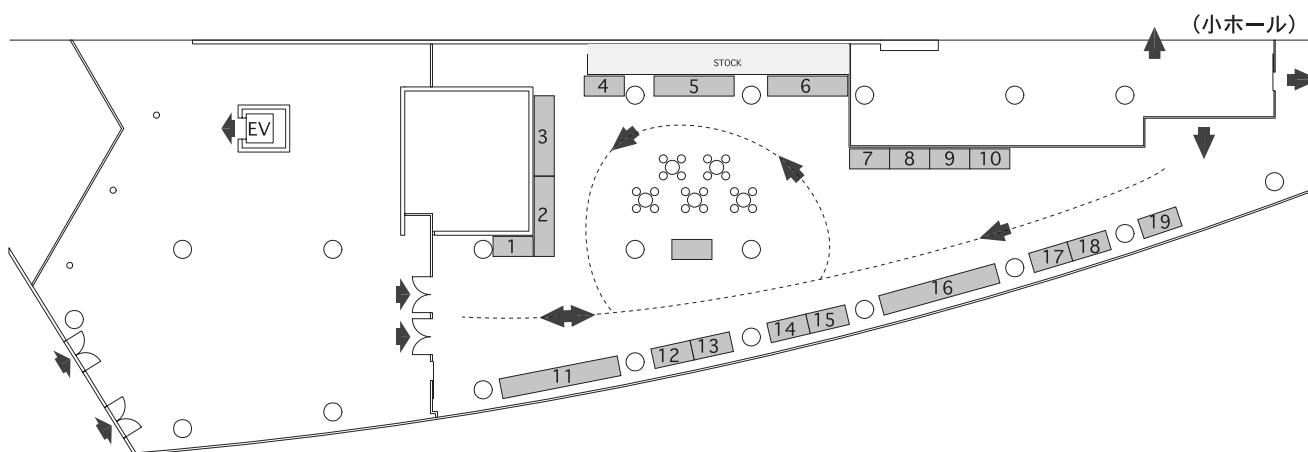
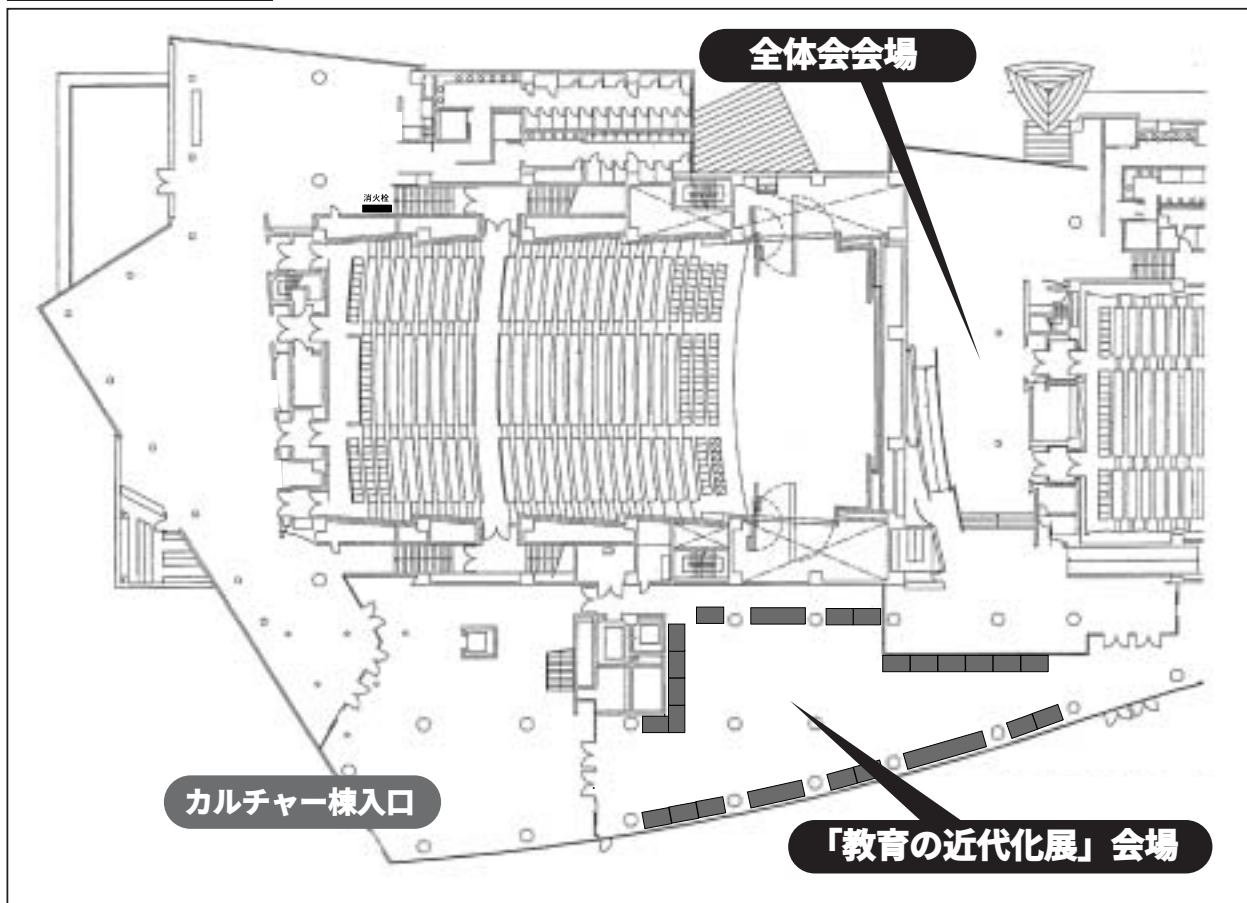
主催：（財）日本視聴覚教育協会／日本視聴覚教具連合会

出展社名	出展内容
文部科学省 www.mext.go.jp/ 日本視聴覚教具連合会 www.shiguren.jp/ NHK www.nhk.or.jp/	■広報
泉（株） www.izumi-cosmo.co.jp/screen/	■マグネットスクリーン WOL-FXの紹介：ケースごと黒板に簡単にセットでき、書き込み、消去も可能なスクリーン ■プロジェクターカート PJ-CWの紹介：配線・準備の面倒を解消したコンパクトなプロジェクターカート、普通教室で視線を遮らないコンパクトな高さです
（株）内田洋行 www.uchida.co.jp/	■教室の黒板をPCの入力装置に変えるe黒板の紹介。（電子情報ボードユニットの活用とわかりやすい教科学習のためのビデオクリップ、デジタルコンテンツ配信）
映機工業（株） www.eiki.jp/	■液晶プロジェクター&DLPプロジェクター各種 ■ワイヤレス送信プロジェクタ ■DVD・TVチューナー・ワイヤレススピーカー付DLPプロジェクター
（株）エデュコム東京 www.educom.co.jp/	■校務支援システムの新製品EDUCOMマネージャーC4th（シーフォース）の紹介。前バージョンの活用校のご要望からさまざまな新機能が追加され、さらに使いやすく、便利になりました！
NTTコミュニケーションズ（株） www.ntt.com/	■子どもメディアフォーラム運営協議会とタイアップし、全国で展開している「インターネット子ども教室」にて利用されている体験型教材「ドットコムキッズ」の紹介 ■“簡単”・“便利”・“効果的”をテーマに各地で実践を行ってきたデジタル教材オーガナイザー（DeTeMO）の紹介
（株）エルモ社 www.elmo.co.jp/	■書画カメラ（実物投影機）から始まるICT活用授業の提案：書画カメラ（実物投影機）とプロジェクターで教材を大きく映して、あらゆる学習現場で集中力の高い授業を実現・学習効果をアップさせる。
（株）学習研究社 www.gakken.co.jp/	■ICT機器・校内LANは整備された・・・！「授業に使えるコンテンツは？」 ■授業で使える動画コンテンツとはどういうものか？ ■授業で使える「電子掛図」や小・中学校「理科」「社会」を中心とした動画コンテンツの紹介
カシオ計算機（株） www.casio.jp/	■進化したデジタル書画カメラとe黒板（インタラクティブユニット）により教材を効果的に掲示し、児童の関心を高め・理解を深めることを目指したICT活用授業をデモンストレーションします。

出展社名	出展内容
(株) きもと www.kimoto.co.jp/	■電子黒板「ディラッドファイバー」の紹介：お手持ちのプロジェクターをセットするだけで誰にでも簡単に使える大画面タッチパネルモニターです。教育現場のIT環境づくりをサポートします。
シャープシステムプロダクト (株) www.study.gr.jp/	■地上波デジタル放送に対応し、フルハイビジョン映像を鮮明に表現することができるAQUOSベースのインフォメーションディスプレイの紹介 ■教育用基本ソフトウェア「スタディシリーズ」による「分かる授業」の提案
(株) ジャストシステム www.justsystem.co.jp/school/	■自由回答などのテキストデータを、素早く集計、分析できるテキストマイニングツール「TRUSTIA」をご紹介。 ■授業改善、フィールドインタビューなど、データマイニングとは異なる視点での分析に役立ちます。
東京書籍 (株) www.tokyo-shoseki.co.jp/	■2007年教育映像祭最優秀作品賞を受賞したビデオソフト「マザー・テレサ あふれる愛」、優秀賞を受賞した「学校への不審者侵入から命を守る」を中心とした、授業で活用できるビデオソフトとパソコンソフトの紹介
日本電気 (株) www.nec.co.jp/educate/	■授業支援ソフトウェア Netgroup Assistの紹介。 ■総務省のNHK教育用映像の配信実証実験プロジェクト「オアシス」の紹介
日本ビクター (株) www.jvc-victor.co.jp/	■大画面電子情報ボードシステム『ユビコムV70』の紹介：これからの授業の進め方が大きく変わります！ 電子黒板で楽しくてより理解度が深まる、理想的な授業が可能になります。
パイオニアソリューションズ (株) wwwbsc.pioneer.co.jp/edu/	■プラズマ電子情報ボードの紹介：ICTを積極的に活用し、わかりやすい授業を実現するためのツール。当社ブースで「教育の情報化」時代のツールをご確認ください。
パナソニックSSマーケティング (株) www.pssm.co.jp/	■従来のアナログ方式の校内放送設備(AV調整卓等)を活かしながら、次世代のデジタル放送にシームレスに対応するデジタル共聴システムの紹介
(株) バーチャル・ハーモニー www.jsdi.or.jp/~hisao713/	■3次元学習ソフトの紹介：科学の理論・算数の考え方が3次元CGの挙動となって、視覚から一挙に一目瞭然となる全編3次元CGの学習可能なソフト。「地球と天体」、小学校算数シリーズ、理科副教材（全編八章）等多数が体験操作可
(株) 文溪堂 www.bunkei.co.jp/	■ITの活用による基礎・基本の定着と学ぶ力の育成：「チャレンジ漢ブリっこ 2007」、「チャレンジ計ブリっこ 2007」の紹介 ■調べる、まとめる、発表する力を育てる：「Webビジュアル学習事典地理 2007」、「Webビジュアル学習事典歴史 2007」の紹介

◆会場案内◆

カルチャー棟



**豪華商品が当たる！
大抽選会実施**

**10月27日(土) 17:15頃
カルチャー棟 展示コーナー**

1 泉(株)	10 カシオ計算機(株)
2 (株)エルモ社	11 NTTコミュニケーションズ(株)
3 (株)内田洋行	12 (株)学習研究社
4 バイオニアソリューションズ(株)	13 (株)きもと
5 文部科学省 日本視聴覚教具連合会 NHK	14 映機工業(株)
6 日本ビクター(株)	15 (株)文溪堂
7 東京書籍(株)	16 パナソニックSSマーケティング(株)
8 (株)ジャストシステム	17 (株)エデュコム東京
9 日本電気(株)	18 (株)バーチャル・ハーモニー
	19 シャープシステムプロダクト(株)

平成19年度 各団体功労者

平成19年度 全国放送教育研究会連盟功労者			
山形県	今井 義憲	前 山形県メディア教育研究協議会会長	
東京都	坂田 紀行	前 全国放送教育研究会連盟副理事長	
奈良県	福本 哲恵	元 奈良県放送教育研究協議会理事長	
山梨県	丸山 文雄	元 山梨県放送教育研究協議会会長	
平成19年度 日本学校視聴覚教育連盟賞			
長野県	浅原 浩	前長野県視覚・放送教育研究会副会長	
長野県	高地 崇佑	前長野県視覚・放送教育研究会会長	
山梨県	市川 修策	甲府市視聴覚研究会役員	
名古屋市	太田 暉雄	前名古屋市情報教育研究会事務局長	
高知県	村田 隆	高知市視聴覚教育研究会副会長	
千葉県	横山 亮一	千葉県視聴覚教育研究会事務局長	
大阪市	樋口 洋三	大阪市小学校教育研究会視聴覚部副部長	
平成19年度 全国高等学校メディア教育研究協議会功労者			
埼玉県	丸山 光夫	前埼玉県高等学校視聴覚教育研究会会長	
千葉県	大野 隆敏	元全国高等学校視聴覚教育研究協議会事務局員	
平成19年度 全国視聴覚教育連盟功労者			
岩手県	菊池千賀子	現岩手県南第一地域視聴覚教育協議会事務局書	
山形県	菅井 貞夫	元大寺視聴覚技師会会長・現顧問	
茨城県	後藤 弘文	現茨城県視聴覚教育指導員	
群馬県	田島 薫	現高崎市視聴覚教育技術者連盟技術専門部長	
埼玉県	村越 久雄	元彩の国埼玉映像連盟会長・現相談役	
千葉県	小濱 清一	元千葉県視聴覚ライブラリー連絡協議会監事	
東京都	原口 修	現（財）文京アカデミー視聴覚ライブラリー生涯学習指導員	
神奈川県	杉本千代子	現座間市視聴覚教育研究協議会会計役	
新潟県	布施えい子	元上越地区広域視聴覚教育協議会事務職員	
山梨県	広瀬 慎吾	元山梨県社会教育放送研究会理事	
岐阜県	福井 徳保	元美濃加茂市社会教育視聴覚協議会副会長・現理事	
愛知県	日比 孝志	元愛知県総合教育センター研究指導主事	
長崎県	鈴木 剛	現長崎県教育庁社会教育主事	
鹿児島県	溝口 涼子	元鹿屋市立視聴覚センター所長	
仙台市	半澤さつ子	現仙台視聴覚同好会総務	
北九州市	木村 健一	現北九州市八幡西区A V E の会会長	

第11回 視聴覚教育総合全国大会
第58回 放送教育研究会全国大会
合同大会（東京大会）

大 会 要 項

平成19年10月26日発行

発行

全国放送教育研究会連盟、**NHK**
視聴覚教育総合全国大会連絡協議会